



あらゆる境界線に見えてくるもの

# DIVERSITY IN THE ARTS PAPER<sup>04</sup>



# DIVERSITY IN THE ARTS PAPER INTRODUCTION

“障害者”と聞くと、どこか心がざわざわとします。多くの人にとって、未だ彼らは遠く、未知の存在。このざわざわは、どこからくるのだろうと見つめてみると、知らない人とはじめて対面するときの感覚とも、少し似ているような気がします。たとえば、はるか遠い国に暮らす人々は、どんな言葉を持ち、どんな生活を送っているのだろう？ という未知と同じように。そして、その未知の向こう側にあるいくつかの違いを越えて理解しあえたときには、大きな喜びが待っていることも、私たちは根本的には知っています。

この「DIVERSITY IN THE ARTS PAPER」は、日本財団が新たに発足した「日本財団DIVERSITY IN THE ARTS」という取り組みのもと、日本各地で表現活動を行う障害のある人たちのアート作品と、それを取り巻く文化を広く紹介すること、そこから新たなプラットフォームを作りだすことを目的として創刊しました。

彼らの中には、言葉を持たない人もたくさんいます。そんな彼らが心の平穏を保つため、または、心を喜びで満たすために必要なものの一つに、アートなどの表現活動があります。そう、彼らにとって、何かを表現することは食事をするのと同じくらいに大切なことでもあるのです。

ここで私たちが扱うアートという言葉は、美意識や知識がないと語れないような高尚なものではありませんし、作品につけられた高い値段だけがその価値を決めるものだとも思っていない。それはただ、一つとして同じ生き方などないと、感覚に訴えてくれるもの。言葉のない世界で、ともに喜びあえるもの。凝り固まった思い込みから解き放ってくれるもの。純粹に、心惹かれるもの。画一的な生き方などつまらないと思っているたくさんの人たちに、彼らが描く世界を知ってもらいたいと思っています。

今号は、子どもがテーマです。子どもたちがのびのびと感情を表現することのできるアート活動の場、教育や当事者研究などの専門家の考えに触れながら、ひいてはこれからの地域社会にまで思いをはせてみたいと思います。

表紙の作品：松浦繁《木パートII》  
688×450×220mm / 水彩絵具、木 / 2002年 / 作家蔵  
取材協力：障害者芸術活動支援センター@宮城 (SOUP) /  
NPO法人エイブル・アート・ジャパン  
写真：三浦晴子

# CONTENTS

## [特集] 子どもとアート

### 02 INTRODUCTION CONTENTS

### 03-11 ARTISTS

前田泰宏 / 塗 敦子 / 中牟田健児 / 阿部鉄平 /  
秦野良夫 / 宮崎 寿 / 木村全彦 / SAKURA /  
黒田勝利 / 小林 覚 / 國井 勇 / 似里 力

### 12-13 ATELIER

スタジオクーカ / 社会福祉法人ノーマライゼーション  
協会 西淡路希望の家 / るんびにい美術館 /  
工房まる / 京都ふしみ学園 アトリエやっほう!! /  
カブカブ

### 14-17 INTERVIEW

すべての子どもに居場所がある、  
「みんなの学校」とアートとは？  
木村泰子 (大阪市立大空小学校元校長) ×  
郷 泰典 (東京都現代美術館学芸員)  
[文] 倉石綾子  
[写真] 田上浩一

### 18-21 REPORTS

子どもの可能性を広げる、アートプロジェクト  
横浜美術館 (子どものアトリエ) / NPO 法人芸術家と子どもたち /  
児童デイサービス ベンダアート / ハート&アート空間 ビーアイ /  
Museum Start あいうえの / 対話で美術鑑賞  
「アーツ×ダイアログ」 / ソーシャルサーカス /  
ポーダレスアートスペース HAP  
[文] 村岡俊也 / 佐藤恵美  
[写真] 福田喜一 / 松本昇大

### 22-23 INTERVIEW

太郎と直太郎。絵を描いて知る君のこと、僕のこと  
[写真] 松原博子  
[文] 菅原良美

### 24-27 INTERVIEW

障害のある子どもたちのこと  
熊谷晋一郎 (当事者研究・小児科医)  
[文] 小川知子  
[イラスト] 朝野ペコ

### 28 BOOK REVIEW

子どもと読みたい、ダイバーシティな読書案内  
[文] 森岡哲行 / 清水千秋

### 29 SERIES

アートの境界線に立つ  
藤 浩志 (美術家)  
表現とは「何かを伝える」よりも「何かとつながる」ための行為  
[構成・文] 井出幸亮

### 30 SERIES

THE OUTSIDE IN ART  
Dr. ロジャーのアートレクチャー  
第1回「子ども」  
[構成・文] 石田エリ  
[コラージュ] ガイ・ネイマン

### 31 INTERVIEW

目の見えない人が植物に触れる行為を通して  
視覚と触覚の相互作用を生むアート「Touch Tours」  
エレン・アンリエット・サーク (アーティスト)  
[構成・文] 網野奈央 (torch press)

### 32 ARTISTS

松浦 繁





## 写真には写らない風景画

前田泰宏 / YASUHIRO MAEDA (1970-)

大阪〈西淡路希望の家〉の美術部に所属する前田泰宏さん。水曜日の16時半と土曜日の10時にいつもびったり美術部に現れ、制作を開始する。描くのは主にアクリル絵具による風景画で小さい頃に習っていた油絵の描き方がベースとなっているそうだ。現在はアクリルに木工ボンドを混ぜて使用している。制作は、自分で撮った写真を、まるで細かい図面と照らし合わせるように、丁寧に絵筆から色をドロップ。どれだけ写実的なのかといえまったくそうではない。言ってみれば写真には写らない美しさを、写真を見ることで確認している気さえしてくる。抽象的な切り絵のような風景、もうすでに前田流の世界認識の方法を確固たるものになっている。[文:中村悠介]

- 1. 三段壁 / 1030×1240×30mm / アクリル絵具、キャンバス / 2009年 / 西淡路希望の家蔵
  - 2. 鍾乳洞大松茸 / 805×1100×19mm / アクリル絵具、キャンバス / 2013年 / 西淡路希望の家蔵
  - 3. 石灰華の滝 / 900×1200×15mm / アクリル絵具、キャンバス / 2014年 / 西淡路希望の家蔵
- 写真:高橋マナミ

1



2



3



## モノクロの世界を、自分の色に塗り変えるとき

塗 敦子 / ATSUKO NURI (1971-)

宮城県仙台市にある、生活介護事業所「こぶし」に入所している塗敦子さん。光がたっぷり入る部屋の片隅にあるスペースをアトリエに日々制作している。絵を描き始めたのは1999年。外部指導員でイラストレーターの高橋里美さんのアドバイスのもと、モノクロ写真を模写し、想像で着色をする手法に出会う。「最初は絵を描くことを模索していた塗さんですが、高橋さんとの出会いによって独特の色使い、「塗アート」が確立されていきました」と話すのは、施設長の渡部きみ江さん。サインペン、ボールペン、色鉛筆とくるくる筆を変えながら、建物、動物、人物を描いていく。モチーフの中には地元仙台の景色や、お祭りなどもあり、日常見ている“色”を、記憶をもとに塗っていく。

[文:菅原良美]

1. さくら / 250×310mm / サインペン、クレヨン、クーピーペンシル、蛍光ペン、油性ペン、水性ペン、ボールペン、紙 / 2018年 / こぶし蔵

2. まち / 250×310mm / サインペン、クレヨン、クーピーペンシル、蛍光ペン、油性ペン、水性ペン、ボールペン、紙 / 2018年 / こぶし蔵

取材協力:障害者芸術活動支援センター@宮城 (SOUP) / NPO 法人エイブル・アート・ジャパン

写真:志継康平



1



2



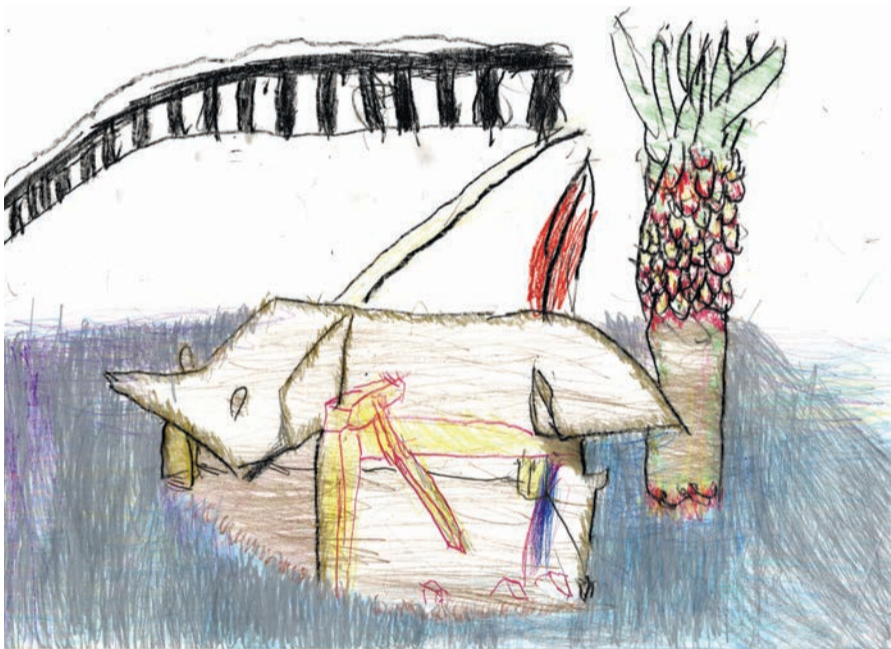
**理想の作画を求め、スタイルさえもガラリと変える  
中牟田健児 / KENJI NAKAMUTA (1975-)**

〈工房まる〉を代表する作家の一人が中牟田健児さんだ。2007年の入所以来、チャコペンを使った写実的な作品から、日本の漫画を彷彿とさせる躍動感のある人物画、陰影を強調する色鉛筆の作品……、変幻自在なタッチと才能を武器に多彩なスタイルの作品をものしてきた。その数、実に1500点超！ そんな中牟田さんの特徴のひとつに、独特な作品名がある。《びゆる》《たみは》《ひだりせせ》など、言葉の意味よりもむしろ語感の心地よさを表したネーミングは、作品そのものと相まって、見るものに忘れがたい印象を与える。「感じたものを、感じたままに表現していきたい」という画家の言葉は、作品名にも通じているようだ。そんな中牟田さん、最近ではクレヨンを使った抽象画に夢中なのだそう。[文：倉石綾子]

- 1. マカロニペンギン / 357×252mm / パステル、紙 / 2007年 / 工房まる蔵
- 2. 之、必田 / 270×380mm / 色鉛筆、紙 / 2010年 / 工房まる蔵
- 3. バスケ3 / 270×195mm / 色鉛筆、紙 / 2007年 / 工房まる蔵
- 4. モルディブ / 236×330mm / 水彩絵具、紙 / 2007年 / 工房まる蔵



1



2



3



4



## 「抽象画」の枠にとらわれず、実験する感性

阿部鉄平 / TEPPEI ABE (1991-)

キャンバスの上でうごめく色彩から吹き出すエネルギー。“実験と検証が好き”という阿部鉄平<sup>あべてっぺい</sup>さんは、油絵をベースにしながら、カラースプレー、紙粘土、シリコンペン、接着剤など、さまざまな素材を使って心のままに自分を表現する。小学3年から高校3年まで絵画教室に通い、感性をひらき独自の画風をつかんできた。はじめは「瓶」をひたすら描き続け、瓶の中に模様を描き出したのをきっかけに、中から線や色が吹き出し、今のダイナミックなスタイルに。数年前に自宅の庭に自らアトリエを建て制作をはじめた。頭で考えるのではなく、直感で描くこと、“部分的に、集中的に”を心がけ、見た人にインパクトを与えられる抽象画を目指している。[文:菅原良美]

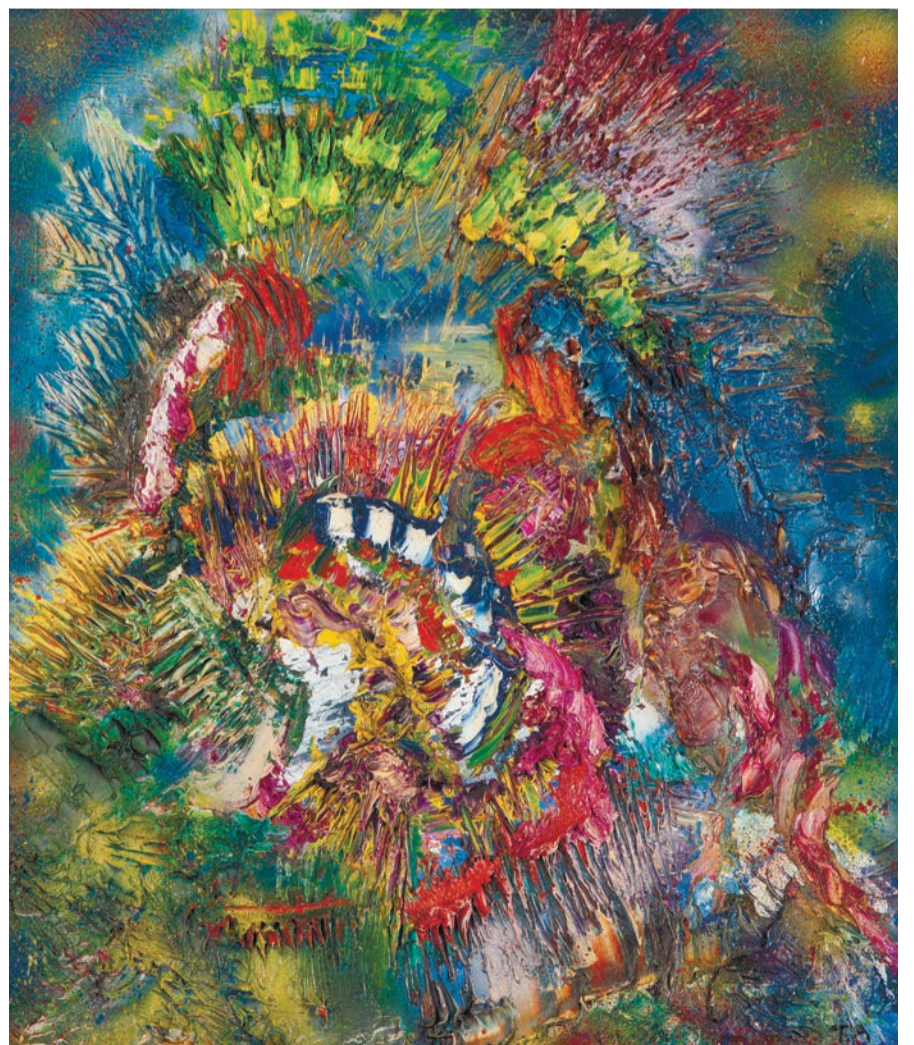
1. ミラクルカラー / 410×318mm / ハードパステル、画用紙 / 2008年 / 作家蔵
  2. HOPE / 530×455mm / カラースプレー、紙粘土、油絵具、キャンバス / 2013年 / 作家蔵
  3. サンシャイン / 530×455mm / カラースプレー、油絵具、キャンバス / 2013年 / 作家蔵
- 取材協力:障害者芸術活動支援センター@宮城 (SOUP) / NPO法人エイブル・アート・ジャパン  
写真:三浦晴子



1



2



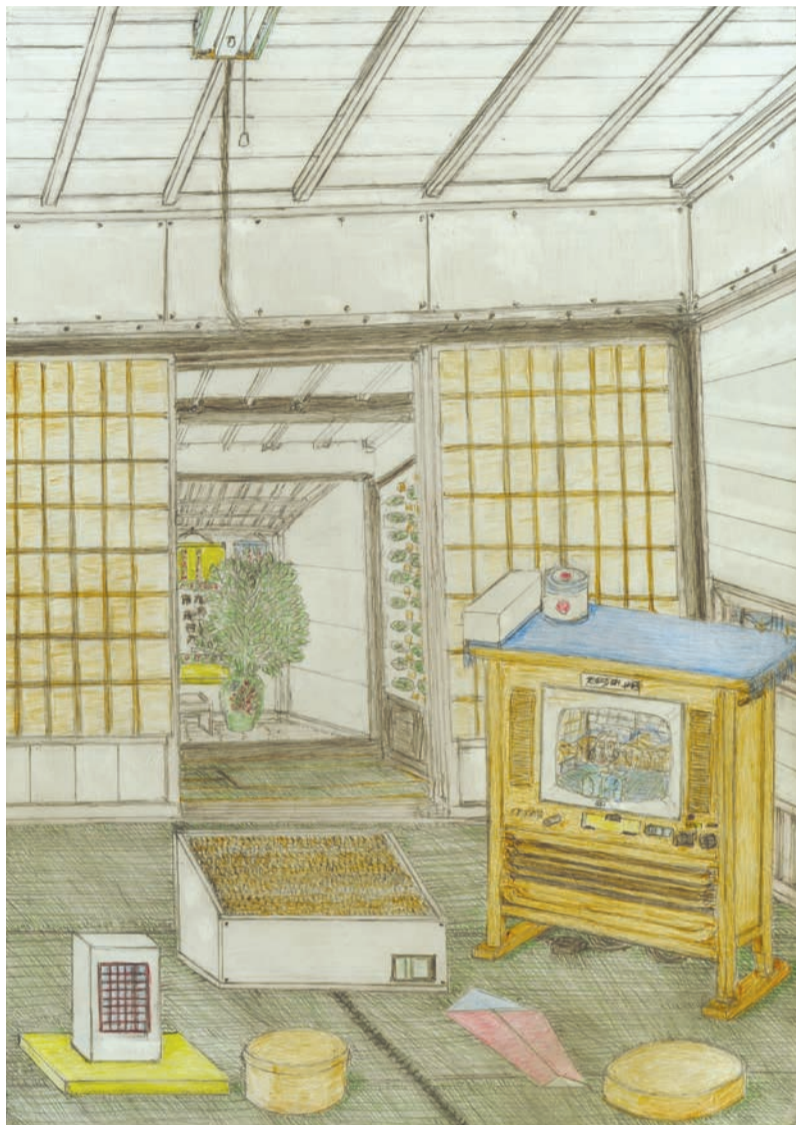
3



**ゆっくりと、記憶をたどりながら描く**  
**秦野良夫 / YOSHIO HATANO (1935-2007)**

木造の民家だろうか。畳の部屋は襖で仕切れ、奥の床の間には掛け軸がかかっている。秦野良夫さんは少しずつ角度を変え、この部屋を何枚も描いている。ここはどうやら秦野さんがかつて住んでいた家らしい。だが作品をよく見ると、手前には道具や機械が不自然に置かれている。古い型のテレビや折り紙、蚕を育てる道具のようなものもある。これらもすべて秦野さんの記憶のなかにある物なのだ。彼は生後間もなく高熱が続き、脳と聾啞に障害があった。子どものころから機械類が好きで、農機具などを眺めていたそうだ。鉛筆と色鉛筆、そして定規代わりに菓子箱を使いながら描いていたという。ゆっくりと、ゆっくりと、思い出をなぞりながら。[文：編集部]

- 1. 家の記憶 / 515×364mm / 鉛筆、色鉛筆、紙 / 2004年 / 日本財団蔵
  - 2. 家の記憶 / 515×365mm / 鉛筆、色鉛筆、紙 / 2004年 / 日本財団蔵
- 写真：大西暢夫

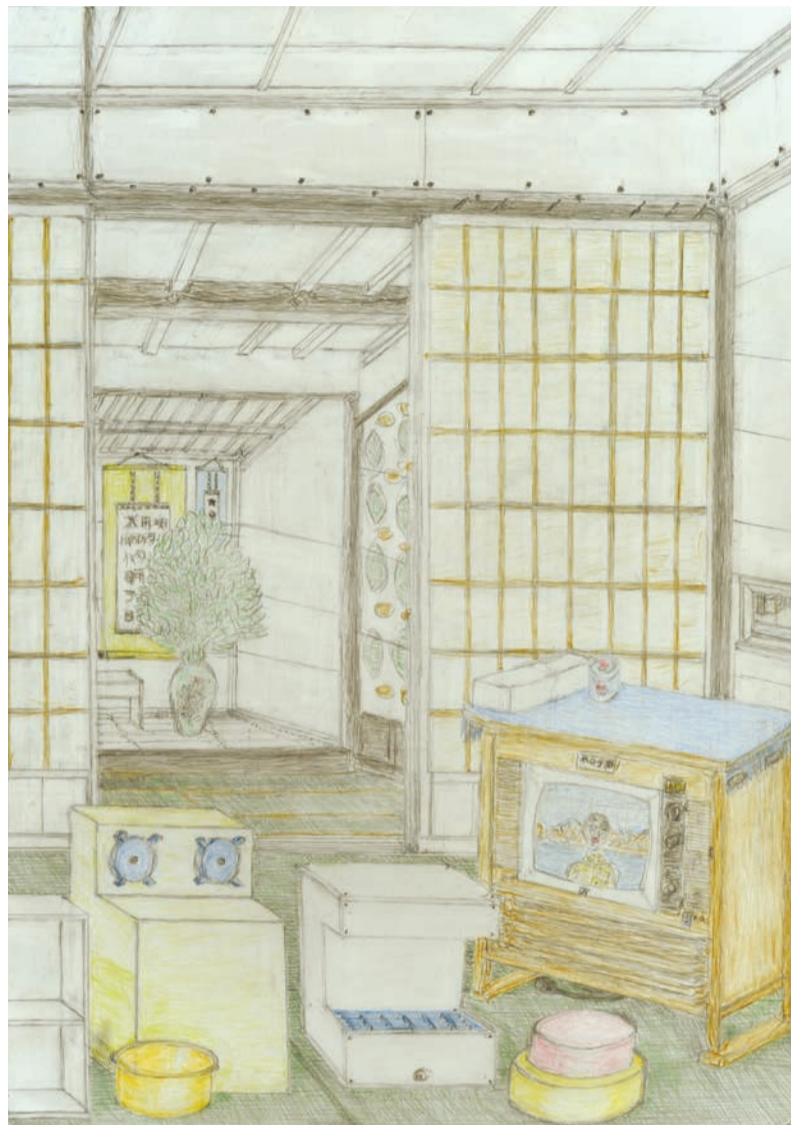


1

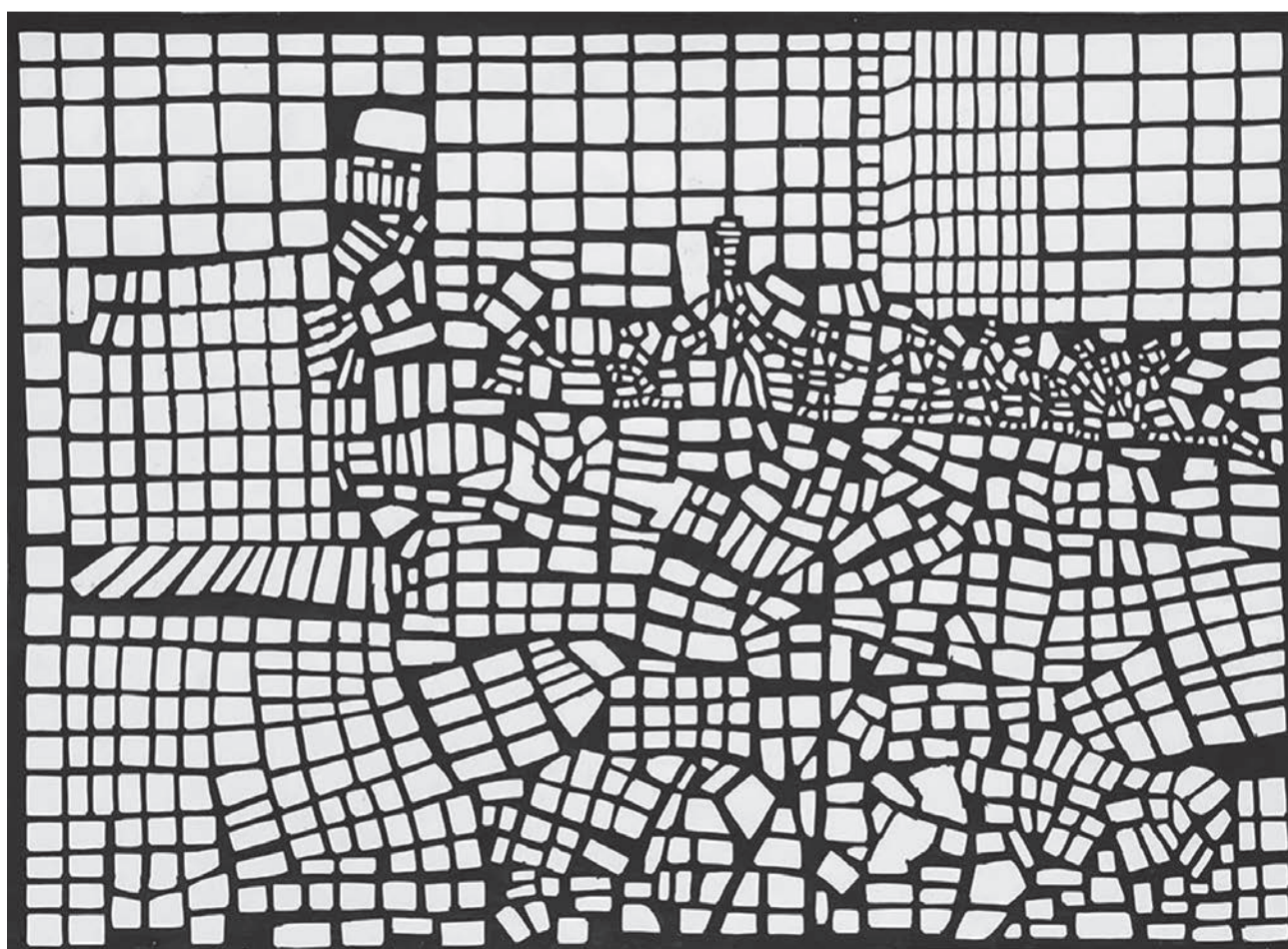
**線を消したり、加えたり。切り絵の新しい遠近法**  
**宮崎 寿 / HISASHI MIYAZAKI (1968-)**

切り絵といえば、下絵の黒く描かれた輪郭線ではなく、空白の部分を切り抜いてその陰影のシルエットを楽しむものだ。その性格上、何が描かれているのか具体的にわかる図案が多い。しかし宮崎寿さんは独自のスタイルで切り絵を完成させる。教本の下絵の中から自分の好きな図案を選び、黒や青など色画用紙の上にその図案のコピーをホッチキスでとめる。あらかじめ下絵に描かれている線を修正液で消し、そこになかった新たな線をたくさん付け加えて切り取っていく。細かく切り出された線と形はくねくねとうねったり、一部分だけ突如顔のような形が浮かんだり。線と形で画面上に新たな遠近法をうみだしていく。書店で地図帳を買うのが好きな宮崎さん。地図上に広がる海、山川、大地にもその線や形を見いだすのだろうか。[文：嘉納礼奈]

- 3. 無題 / 294×450mm / 紙 / 2009年 / 向陽園蔵
- 写真：高橋マナミ



2



3

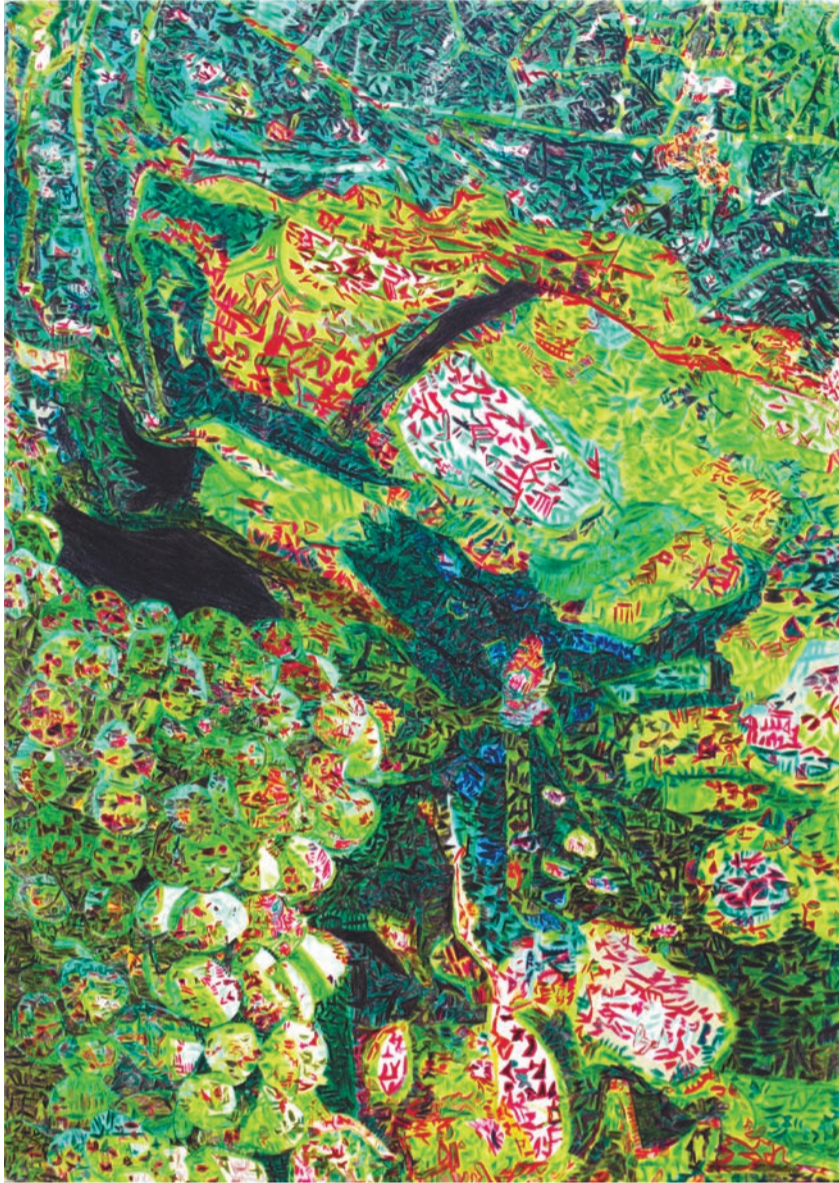


## 筋肉のような“キュニキュニ”文様

木村全彦 / MASAHIKO KIMURA (1984-)

木村全彦さんは京都市伏見区の〈アトリエやっほ!!〉を代表する存在だ。これまで国内外で作品展示を行ってきた。まず、その色鉛筆による絵画作品の歪な迫力にはギョッ、とするほどのインパクトがあるが、近づくくと目に入るのは細かなギザギザ。これは木村作品の特徴で、ラテン語で“くさび”という意味の“キュニキュニ”と呼ばれ、隙間を埋めるように刻印されている。スタッフに尋ねると「だんだん出てきた」そう。その文様はまるで作品全体を支える筋肉のようでもあるし、風景を多面体のパラレルとして浮き上がらせているようにも見える。ぜひとも実物を見てほしいところだ。ちなみに現在、このキュニキュニはどんどん大きくなってきているそう。[文:中村悠介]

1. マスカット / 728×515mm / 色鉛筆、紙ボード / 2010年 / 京都市ふしみ学園蔵
2. 水牛 / 910×1167mm / 色鉛筆、紙、パネル / 2011年 / 個人蔵



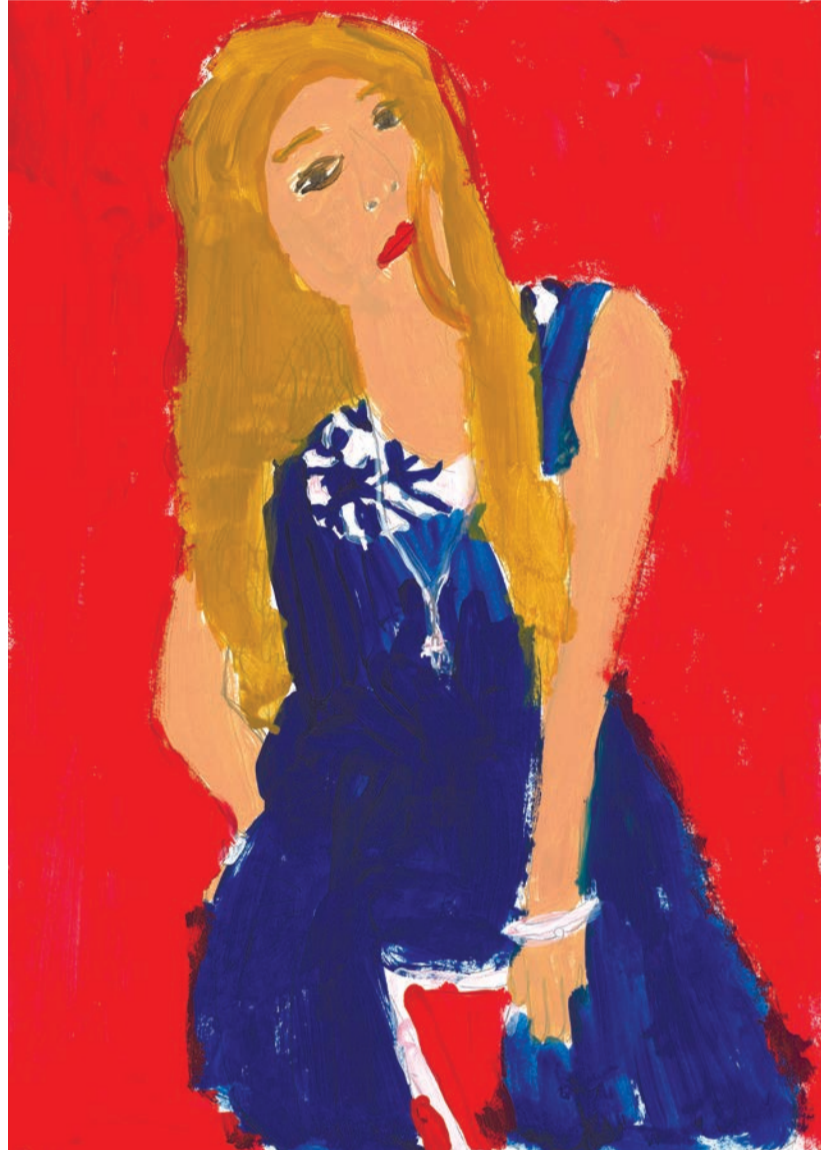
1

## 描いたキャラクターが動く日を夢見て

SAKURA (1988-)

ファッションな服に身を包み、美しい色に彩られた、クールで、時にコケティッシュな女性たち。かつて祖父が呉服屋を営んでいたという子どもの頃の環境や、メイクアップを勉強していた姉の影響もあるのか、どの絵にも作者であるSAKURAさんの美意識が漂う。インスピレーションのもとになるのは、ファッション誌や感動した展覧会のカタログ、お気に入りの映画など。それらのモチーフは、SAKURAさんが描くとまったく別の魅力を持って画面に息づく。「この子だったらどんな行動を起こすだろうとか、考えながら描くのが楽しい。いつか絵本をつくってキャラクターを動かしてみたい。今は未熟なので20年描いたら。あと16年」と、はにかむような笑顔で語った。[文:杉瀬由希]

3. 青服の女性 / 420×297mm / アクリル絵具、紙 / 2016年 / studioCOOCA蔵



3



2



## 猛烈に描かれる漫画の疾走感

黒田勝利 / KATSUTOSHI KURODA (1981-)

自らを「破壊者」と名乗る黒田勝利くろだかつとしさんは大阪（西淡路希望の家）美術部の鬼才だ。通って7年、描いているのはずっと漫画でタイトルは《人類崩壊》《世紀末》など穏やかではない。その中身も生首が並び、ガイコツには矢が刺さる。いわく「僕は悪魔の神様。それの方がカッコいい。正義が必ず勝つとは限らへんし」。内容は展開を分かりかねる漫画が多いが、なによりバリバリの疾走感がたまらない。猛烈に描きまくっている。驚いたのは物語の結末から描くこと。想像するに新しいイメージの方に手が動く瞬発力というか、この疾走感を見れば理解できる気がする。いわく「考えると時間がかかってしまうから。それでも最初のストーリーは忘れない」とのことだ。[文：中村悠介]

1. 平成かざじぞうの巻 / 392×542mm / 水性ペン、紙 / 2011年 / 西淡路希望の家蔵
2. じごくの丸ちゃん!! / 392×542mm / 水性ペン、紙 / 2011年 / 西淡路希望の家蔵  
写真：高橋マナミ



1



2



## 抽象画に描かれた既視感は「文字」

小林 覚 / SATORU KOBAYASHI (1989-)

ヘッドホンから流れるスピッツを聴きながら、黙々とドローイングを始めた小林覚さん。水性ペンの力強い線が交差した図画のところどころが、明るい色調でカラフルにベタ塗りされ、曲線と直線が複雑に組み合わさった抽象画だ。その絵に覚える既視感の正体をたどっていくと、それが「文字」であることが分かる。自閉症である小林さんは養護学校中等部の頃に、学習ノートも日記もこの不思議な文字で書くようになり、当時の教諭がこの文字をアートとして肯定したことで才能が開花した。下描きはせず、線の伸びる方向は即興的だが、独自の法則に則ったペンの動きには迷いが無い。描いているプロセスそのものが彼にとっての醍醐味なのだ。[文:渡辺麻貴]

1. 林檎葡萄 / 1083×765mm / アクリル絵具、クレヨン、水彩紙 / 画用紙、水性ペン / 制作年不詳 / るんびにい美術館蔵



1

## 虹トラック「國井号」はゆくよ、どこまでも

國井 勇 / ISAMU KUNII (1961-)

B2サイズの大きな画用紙いっぱいに広がるマス目。その1つひとつがカラフルに彩色されている。ときには、緑から青、紫、赤、オレンジ、黄色と虹のような色のグラデーション、またあるときは、アトランダムにそれらの色がちりばめられ、チカチカ、キラキラ光っている。カラフルなマス目の下にはよく見ると車輪らしき黒い丸が数個並んでいる。これは國井勇さんが描く「虹トラック」、もしくは「國井号」である。大の車好きの國井さん。国道を行き交う大型のトラック、シヨベルカー、除雪車などをひとしきり愛でるのが日課である。自室で描かれることが多い「虹トラック」。そこに積まれているのは、荷物か除雪車の雪か。一面真っ白の雪景色の中、キラキラときらめく夢を乗せて今日も走っていく。[文:嘉納礼奈]

2. 車 / 175×245mm / 水性ペン、画用紙 / 2010年 / 向陽園蔵  
写真:高橋マナミ



2



## アクシデントが生んだ立体作品 似里 力 / CHIKARA NISATO (1968-)

綿糸をハサミでチョキンと切り、結ぶ。結び目と結び目の真ん中を切ってまた結ぶ。これをひたすら繰り返す、約5mmの等間隔に結び目をつくる。結び目が無数に並んだ糸を巻き取っていき、手のひらサイズの糸玉になったら完成。もともとアトリエの共同作業として行われていた草木染糸の製作中、巻き取った糸が絡まるアクシデントが発生。やむを得ず切って結び直す。似里力さんはこの所作を気に入り、9年前から毎日続けている。弱視のため指が鼻にくっつきそうなほど近づけてひとつずつ結び目をつくる。だが似里さん自身は《無題》と名付けられた糸玉を作品だとは思っていない。ただ切って結ぶ喜びがあるだけだ。結び目は今日も増え続けているに違いない。[文:渡辺麻貴]

1. 無題 / 高さ50~60×直径70~80mm (可変) / 綿糸 / 2016~2017年ごろ / るんびにい美術館蔵
  2. 無題 / 高さ50×直径70mm (可変) / 綿糸 / 制作年不詳 / るんびにい美術館蔵
- 写真: 松岡一哲



1



2



## スタジオクーカ / studioCOOCA 一人ひとり、できることで社会とつながるサポートを

【写真】関めぐみ 【文】杉瀬由希

障害者が創作活動を通じて社会と接点を持ち、仕事につなげていくサポートを行う就労支援施設（studioCOOCA）。10代から60代まで、障害の種類も症状も異なるメンバーが、絵や立体作品の制作、楽器演奏、紙芝居のパフォーマンスなど思い思いの作業に動かし、その成果をさまざまなイベントで発表している。近所には彼らの作品を展示販売する（GALLERY COOCA）もあり、併設のカフェではメンバーが厨房から接客、配膳までを担当。少しでも、ゆっくりでも、自分でできることをやるのがCOOCAの方針だ。

作品の売り上げは、オリジナルは半分が作家に還元され、二次利用の商品はメンバー全員で分配される。報酬を受け取ることで彼らの中に仕事という意識が芽生えてきたと、（GALLERY COOCA）施設長の北澤桃子さんは語る。「彼らと共にできることは、きっとまだまだたくさんあるはず。それを探りながら、より多くの人にこの活動を知ってもらえるよう発信していきたいと思っています」。

【Information】

studioCOOCA（スタジオクーカ）  
神奈川県平塚市平塚4-15-16  
tel. 0463-73-5303  
<https://www.studiocoooca.com/>



## 社会福祉法人ノーマライゼーション協会 西淡路希望の家 / Nishiwaji Kibou no ie 各々が独壇場、美術部は「寄り道的な時間」

【写真】高橋マナミ 【文】中村悠介

大阪・東淀川駅にある〈西淡路希望の家〉は1985年に開設された主に知的障害のある方たちが通う就労支援施設で現在60名ほどの利用者が軽作業などに従事している。年に2回開催される名物マーケットイベント「スーパーハイパスペースー宇宙市」は、スタッフの金武啓子さんが「いわゆる作業所が作る製品にはないようなもの」というようにキラキラやラメを使用した「ケミカルな方向」のグッズ等が並び好評を博している。

2003年から発足した美術部は現在12名の部員が在籍月に3回活動が行われている。「目的はみんなが寄り道的な時間を過ごす場所であること」。部室には、緩衝材のプチプチに色を塗る部員、恐ろしい漫画を描く部員、スポンに色を塗り始めた部員、CMソングを歌い続ける部員などがいた。各々独壇場のフリースタイル。社会にはいろんなひとがいる、いろんな考えがある。けれどその“いろんな”はまだまだ足りない。この部室がそれをまるごと表現しているように見えた。

【Information】

西淡路希望の家  
大阪府大阪市東淀川区西淡路1-13-28  
tel. 06-6323-4991  
<http://www.normalization.or.jp/publics/index/27/>



## るんびにい美術館 / Lumbini Art Museum 誰かの“あるがまま”に触れ、自分の“あるがまま”と出会う場所

【写真】松岡一哲 【文】佐藤 啓

「ここにあるのは『あるがまま』の、命の輝きがそのまま伝わってくる表現たちです。美しかったり型破りだったり、誰かの『あるがまま』は自分の『あるがまま』を思い出させてくれる。そんな名づけようのない表現たちを、かりそめに『ボーダレス・アート』と呼んでみるのもいいかもしれません」。そう話すアートディレクターの板垣崇志さんは、2007年に設立された〈るんびにい美術館〉の立ち上げ時から運営に携わってきた。「世界は無数の『ボーダー（境界）』でできているようですが、心の中からボーダーを消し去ったらそこに残るのは命の輝きだけなのかもしれない。だから『ボーダレス・アート』は、観る人の心の中の境界を取り払うきっかけになるのだと思います」。2階のアトリエは、明るくて開放的な空間。一般公開もされている。「『あるがまま』の表現をより深く体験してもらうために、創造される現場も覗いてみてほしい。作品が生まれてくる過程に触れると、自分と向き合うきっかけになったり、なぜだか元気が出てきたりするんですよ」

【Information】

社会福祉法人光林会るんびにい美術館  
岩手県花巻市星が丘1-21-29  
tel. 0198-22-5057  
<http://kourinkai-swc.or.jp/museum-lumbi/>





## 工房まる / Maru

### 障害がある人の存在が当たり前になる、そんな社会がいい

[写真] 榎本一子 [文] 倉石綾子

福岡市内の野間、三宅、野方の3カ所にアトリエを構える〈工房まる〉。ここには現在、50名ほどのメンバーが通っている。活動のジャンルは木工から、陶芸、絵画と幅広い。特に絵画においては石井悠輝雄さん、太田宏介さん、大峯直幸さん、松永大樹さん、柳田烈伸さんといった人気作家を多数、抱える。

「障害者の作品というバックグラウンドなしで、『あ、かっこいい』と手にとってもらえるものを作りたかった」というのは、〈工房まる〉を立ち上げた施設長の吉田修一さん。作家それぞれの個性やキャラクターを際立たせたアート作品からは、彼らの障害ではなく、それぞれの生き方や価値観が垣間見える。「年齢や性別、障害のある・なしではなく、個性を持ったひとりの人間としてお互いを認め合える。それがアートのもつ可能性だと思います」と吉田さん。アートを媒介に、障害のある人の存在が当たり前である社会を目指して、ここ福岡から、そんなメッセージを発信し続けている。

[Information]

工房まる

[お問い合わせ] 野間のアトリエ

福岡県福岡市南区野間3-19-26

tel. 092-562-8684

<http://maruworks.org/>



## 京都ふしみ学園 アトリエやっほう!! / Atelier Yoohoo

### 京都・伏見にデッカいこだまが返ってくる日は近い?

[写真] 高橋マナミ [文] 中村悠介

京都市の南側、名水に恵まれ酒蔵が多く立ち並ぶ伏見。そこにある〈アトリエやっほう!!〉は発足して10年。主に知的障害のある方が通う〈京都市ふしみ学園〉の中にあり、制作を通じてその可能性を試し展開する場だ。このアトリエではそれぞれの制作環境を大切にしているため十人十色スタイルで、京都風と言えば“はんなり”か、みんなどこか穏やかに制作しているように見える。

メンバーの中には数々の賞を獲得している木村全彦さん、国保幸宏さんを始め19名が在籍しているが「今のところは（障害者という）ジャンルの中での評価だと思います。最終的にはカテゴリー関係なく評価されて欲しい。木村さん、国保さんの作品はそういうところに関係なく勝負できるはずなんです」。残念ながら、まだまだ地域では知られてはいない、とスタッフの中島慎也さん。だが現在、彼らが突破口となり他の作家も知られ始めているところ。ここにきてデッカいこだまが返ってくる日は近いかもしれない。

[Information]

京都市ふしみ学園 アトリエやっほう!!

京都府京都市伏見区紙子屋町544

tel. 075-603-1288

<http://atelieryoohoo.com>



## カプカプ / Kapukapu

### つい寄りたくなり、また行きたくなる団地の喫茶

[写真] 阪本勇 [文] 佐藤恵美

20年前、地域作業所として横浜の団地に生まれた〈カプカプ〉は、高齢者の多いこの地域にとって欠かせない場所となった。店構えは古着や雑貨などが並ぶリサイクルショップだが、メンバーが接客する喫茶は毎日常連さんで賑わう。

〈カプカプ〉の接客は少し変わっている。障害が重く横になっているメンバーもいるが、彼女に会うためにコーヒーを飲みに来るお客さんもいて、そこにいるのが彼女の接客だそう。「障害のことを考えていくと世の中の生きづらさの問題点が見えてきますが、それをゆるめる場所となればいいなと思っています」と所長の鈴木励滋さん。仕事を終えて「さよなら〜」と帰るメンバーに「今日は病院の日だったよね」とお客さんが声をかける。ここでは「お客さん」と「メンバー」ではなく、人と人の関係が築かれている。店内を見渡すと、古本や小物、オリジナルグッズ、チラシなどが所狭しと並び、その「雑然さ」が居心地の良さを生んでいるのかもしれない。

[Information]

カプカプひかりが丘

神奈川県横浜市旭区上白根町891-18-4-103

tel. 045-953-6666 (喫茶営業時間: 10:30-18:00 (土日祝定休))

<http://kapukapu.org/>

<https://www.facebook.com/kapuhikari/>





# YASUKO KIMURA × YASUNORI GOH

すべての子どもに居場所がある、  
「みんなの学校」とアートとは？



どんな子どもも安心して通える、「不登校ゼロ」の学校づくりを目指す  
大阪市立大空小学校。そんな小学校の日常を追ったドキュメンタリー映画が  
『みんなの学校』だ。子どもを主語にする教育の現場で、  
果たしてアートはどんな役割を果たせるのか。大空小学校元校長の木村泰子さんと、  
東京都現代美術館の学芸員で子どもを対象としたアート・プログラムを多く手がける  
郷泰典さんが、それぞれの立場から教育とアートを考える。

【文】倉石綾子 【写真】田上浩一





東京都現代美術館（改修工事のため現在閉館中）では、さまざまな「普及プログラム」や「スクールプログラム」を実施。写真は、子どもを対象にしたワークショップ「イタズラ・キッズ探偵団」（2015年 / 写真：川瀬一絵）。

## アートと対極にある？ 図工の授業が抱える問題

郷泰典（以下、郷）：僕は東京都現代美術館で、人びととアートを結びつける橋渡しの役割を担う「教育普及」を担当しています。現代美術のいいところは、作家がまだ生きているところ。そこで、アーティストと学校に出かけて子どもたちに授業を行い、作家の表現や考え方に触れてもらうプログラムなども展開しています。

木村泰子（以下、木村）：郷さんは「アート」をどう解釈されているのですか？

郷：アートは、日常の視点を変えることだと思っています。同じものを眺めていても、見方を変えると、いままで気づけなかったものに気づいたりする。映画『みんなの学校』を見て、大阪市立大空小学校（以下、大空）の教育方針とアートの力には、共通するところがあるんじゃないかと思いました。

木村：違うところから物事を眺めると、同じものを見ていても全く違うものに見えますよね。

郷：視点を変えることができれば生き方に幅が出ます。アートを媒介に、そういうことに気づいてもらえたらと思っています。美術館での体験だけでなく、アートって身の回りにも溢れていますから。そもそも美術を紐解いていくと、個々の作品から離れて、考え方やそのプロセス、あるいは思考そのものにたどり着きます。僕はそれこそがアートだと捉えています。

木村：私ね、実は図工の授業が好きじゃないんです。図工の授業、ご覧になったことがあります？

郷：僕たち学芸員が出張授業を行う場合、図工の時間に当てられることが多いですね。

木村：小学校の6年間というのは、幼児から思春期に差し掛かる、特別な感性を備えている期間。この間の図工の授業がどうあったかでその子の育ちが変わると思っています。私が図工が好きではないのは、自分が小学校高学年だったときの担任が影響しています。図工の時間、その担任に「どうせ下手なんやから、なんぼ描いても変わらへん」って言われたんですよ。その「下手」という言葉が強烈に残って、以来「私は絵が下手やから」って一切描かなくなりました。教員の指導の言葉で一瞬で暴力に変わるんですね。いまにして思えばとても不幸な先生で、反面教師として自分の学びになったのは事実ですが。

郷：出張授業で出かける小学校で子どもたちの作品を見せてもらうと、中にはものすごく面白い絵を描く子がいるんです。僕たちはその子に会えることを楽しみに授業に向かうのですが、そういう子はたいてい、学校や家で何かしらの問題を抱えている子なんです。僕たちの前でその子がまた何かやらかすんじゃないかって、先生たちは彼らを扱いあぐねている。他の子と違う感性を備えているのに、学校の中では問題視されてしまっているんです。

木村：まさに、いまおっしゃったことが教育現場の課題なんです。クラスの平静、平穏を保ちたいから、面白い子をどんどん排除しようとする。平静って、嫌な表現をすると「普通」の子を育てたいってことですよね。でも、アートと「普通」って真逆のもんですよ。

郷：だから出張授業では、「足を使って絵を描くアーティストもいるんだよ」、とか、表現活動はいろいろあるということ子どもたちに伝えています。そういうことを知ると子どもたちも、「あ、それでいいんだ」って興味を持ってくれる。先生がそれをどう思っているかわかりませんが、僕らやアーティストのような第三者の立場の人間が学校の中をかき回してもいいかなと思うんです。

木村：そもそも、人が描きたい、作りたいと思ったことに対して評価をつけることに昔から疑問を抱いていました。図工の

時間って、みんな一緒に作品を作るんですよ。みんな一緒に筆づかい、みんな一緒に濁りのない色、そうすると高い評価がつくんです。中には、「そんなイヤや、綺麗なんて思わへんわ」という子がいて、「そうか、感性は人それぞれね」でいいはずなのに、彼らには高い評価がつかない。

郷：東京都には図工を専門に教える先生（図工専科）がいますが、そういう先生たちとやりとりをしていると、学校の中でも少しずつ意識は変わってきているなど実感します。問題意識を持っている先生たちは、「図工は評価できないものなのに」と葛藤していますから。

木村：私の知る中では図工を研究している教員もいますが、十中八九、彼らの研究授業にはマニュアルがある。スーツケースの中に子どもたちの作品が収められているんですけどね、そのスーツケースに収まらないような、長い棒や大きな風船のような作品は、ポキッと折ったりブシュッと空気を抜いたりして、無理にスーツケースに入れてしまう。

だから大空の同僚と、「学校教育で図工の授業や評価をやめてしまったら、子どもはもっと育つだろうね」って言い合っていました。だって1年生のときから「これはダメ」「これはこうしなさい」って言われ続けたら、子どもはそれしかないって思ってしまう。そうしたら、「普通」という名のスーツケースに自ら入っていきますよ。







東京都現代美術館では、島の小学校との文通を行なったプロジェクト「写真がつなぐ"船の交換便"」(2017年)や、多摩地区の学校にアーティストが訪問する「GO WEST 西へ!!」(2016年)、病院内訪問学級とのプロジェクトなど、学校や病院などでさまざまなプログラムを行っている。写真は「GO WEST 西へ!!」より。



映画「みんなの学校」より。2012年度の児童数・約220人のうち、特別支援の対象となる児童は30人を超えていたが、すべての子どもたちが同じ教室で学ぶ大阪市立大空小学校。校長の木村泰子先生を筆頭に、教職員や地域の住民だけでなく、保護者らの支援も積極的に受け入れた「地域に開かれた学校」として、多くの大人たちで見守れる体制をつくる。その様子を長期で追ったドキュメント。©関西テレビ放送



郷:僕たちが行うアート・プログラムでは、評価というものは一切しないんです。僕たちが学校で授業を行うと、いつもは発言しない子が突然発言するとか、そういうことがあるんですね。先生には見せない顔を見せてくれるんです。だから、先生たちにはその授業をきちんと見てほしいってお願いしています。授業がどう進行するかをチェックするのではなくて、いま、ここでこの子たちに何が起きているのか、普段は表に表れない子どもたちの素質や才能を発見してもらいたい。そんな気持ちでアート・プログラムに携わっています。

木村:普段発言しない子が、郷さんたちの授業では発言する。その違いはなんだと思われませんか？

郷:なんでしょう。僕らがいつも出会っている人間ではないからでしょうか。

木村:私はね、郷さんの授業には「正解」がないからだと思います。先生たちの授業には正解があって、子どもたちを正解へ導くことが授業の目的。そのスキルを持った先生が「いい先生」なんです。だから子どもたちはいつも正解を言わなくてはいけないというプレッシャーにさらされている。でも、郷さんたちの授業では授業者が正解を持たないじゃないですか。子どもたちが何を発言しても「あなたのその意見はオッケーよ」って、どんな発言も排除するのではなく丸ごと受け入れる。だから子どもたちも安心して発言できるんです。

郷:いまのお話、すごく共感します。先生たちは研究授業を行う際に学習指導案をつくりますよね？先生と研究授業を行う際、事前にその内容をチェックしてほしいって渡されるのですが、指導案の中には授業中の子どもたちの想定発言まで記載されているんです。「そんなの予想できないのに、なんでそんなことが書いてあるんだろう」と不思議に思っていました。結局、授業には道筋があって、子どもの発言も全部想定されていて、導かれる解があらかじめ用意されている。そのシナリオに沿った授業がいい授業なんでしょうけれど、でも僕たちはそんな授業はできないですから。

木村:だから私たちが大空の1年目に指導案をすべて断捨離しました。みんな夜な夜な研究授業のために授業案をつくるんですけどね、私、その意味がわからなくて。「なんで指導案なんてつくっているの」と聞くと「研究授業のためです」。「じゃあなんのために研究授業があるの?」、「自分たちの授業力を上げるためです」。「授業力をつけるのはなんのため?」と聞くと、そこで口ごもってしまう。授業力とは結局、いい教師になるため。主語が先生なんです。「ちやうやろ、授業力をつける目的は、子どもを学びに向かわせるためやろ」って言いました。自分たちが「いい教師」になるために行う授業はやめたほうがいい、って。そうやって無駄なものを断捨離したら、先生たちもなんのために授業があるのか、自分たちで考えるようになったんです。授業の目的は、すべての子どもがその子らしく、幸せになるために学びに向

き合うこと。じゃあ、それを叶えるためにどんな授業をすればいいのかって、子どもを主語にした、シナリオのない授業を試行錯誤するようになったんです。そうやって視点を変える中で生まれる新たなジレンマが、評価ですよ。できる・できないという、目に見える点数だけで評価していいんだろうか、って。図工はその最たるものです。

郷:図工に関しても少しずつ変わってきているとは感じます。たとえば図工の発表会では、これまで先生がつくってきた校内展示会を子どもたち自身が手がけるようになった学校も。できた作品だけで評価するのではなく、そのつくり上げるプロセスも含めて判断するという方向にシフトしてきています。

木村:そうやって先生たちが学んでおられる学校は変わっていくでしょうね。

郷:僕たちが授業に行くのは、先生たちを変えたいからという気持ちがどこかにありますね。先生たちの視点が変われば、授業も自ずと変わりますから。

## 大空小学校を変えた、「正解」のない授業

木村:私たちもね、見えない学力が大切だと気づいていながら、どこかで自分の正解に引き込もうとしていたんです。これは体裁のいい洗脳だなんて気がついて正解のない授業の取り組みを始めました。それが、「全校道徳」。子どもたち、全職員、保護者、地域住民みんなが月曜朝に集まって、ひとつのお題をもとにそれぞれが自分の言葉で考えを伝え合うんです。

郷:映画の冒頭で、「大空小学校は誰がつくりませんか」という問いかけを行っていた授業ですね。

木村:これが大空をもつてすごく変えたんです。子どもって、どの子も自分の言葉を持っていてそれを口にすることができるんですよ。大空の子が特別で自分の言葉で語れるわけではなく、大空にはそれを言える空気があるというだけ。子どもは、「言ったらあかん」という空気を読むから口にしないんです。

郷:大人が知らず知らずのうちにそういう空気を生み出しているのかもしれないね。

木村:「全校道徳」の生みの親は、マアちゃん・ユウちゃんという重度の障害のある双子の兄弟なんです。彼らが入学してきた頃、私たちも悩んだんです。マアちゃんやユウちゃんが教室の中において、彼らは何を学べるんだろうって。違う部屋で一から教えた方がいいんじゃないかって。そこで、兄





映画「みんなの学校」より。©関西テレビ放送



弟のお母さんに、みんなの中にいてもらっていいと思う？って聞いたんです。そうしたらそのお母さんがね、「算数の時間、うちの子がここにいて何を学べるんだろうって先生がたは心配している。それほどうちの子にとって失礼なことはない。それは先生たちの自己満足のお節介や」って言うんですよ。「うちの子どもには算数なんてどうでもいい。みんなはどんなときに笑うんだろう、怒るんだろう。みんなはどうやって生きているんだろう、と親と離れて社会に出たときに必要なことを、周りの子どもの表情や言葉から吸収しているんです。それを分断して、一体何を教えるんですか」って。この言葉が大空の礎を築きました。いま求められているものはもっと違うものにある、それで始めたのが「全校道徳」です。

郷：公立の大空ができるのだから、同じように独自の取り組みを始める学校がもっとできていいのって思うんですけれどね。

木村：公立学校の目的って、憲法で保障されている子どもの学びの権利、つまり「すべての子どもが学校の中で子ども同士、学び合う」、それを守るだけなんです。「みんなの学校」は、一人も漏れることなくすべての子どもが地域の公立学校で学ぶ事実をつくるということ。だから「みんなの学校」は大空の代名詞ではなく、全国の公立学校の代名詞なんですよ。

郷：映画を見て大空を特別視してしまうのかな。

木村：子ども同士の営みの中で生まれるものを、どう学びに変えるか。それが教員の仕事ですから、教えのプロになったらダメ。さらにいうなら、教員は「学び」のプロフェッショナルであってほしいですね。

郷：この場合の学びとは、「教員自身も学び続ける」ということですね。実際、僕も出張授業では子どもたちと触れることで、彼らからたくさんを学んでいます。結局、学びってリアルに経験することでしかないんだと実感しますね。

木村：自分自身で映画を見てね、それ以前の傲慢な教員だった自分を振り返ると、いちばん身についたのは「学ぶ」力だったんです。どんな状況でも批判することは簡単ですよ。でも、いいとか悪いとかあそこは特別だからとか、そういう見方をするのではなく、この事実から自分は何を学べるのかというように視点を変えると、世の中の営みが何ひとつ排除されないんですね。自分が嫌だと思うものを「こんなのあかん、嫌だ」と思っても、それは「排除」でしかない。でも、「こうならないために自分はこうすればいいんだ。ここからこれを学ぶことができた」、その学びの姿勢はポジティブでしょう？

郷：そう思える大人が増えたら、世の中に大空のような小学校がもっと増えて、地域社会も変わっていきそうですね。

ドキュメンタリー映画「みんなの学校」  
 全国自主上映会募集中！  
 詳しくは公式ウェブサイト  
 (<http://minna-movie.jp/>)  
 または配給会社東風 (tel. 03-5919-1542) まで。

[Information]  
 東京都現代美術館 教育普及事業

2019年3月下旬までの休館中も、学校や病院、地域などでさまざまなプログラムを行なっている。活動は「教育普及ブログ」(<http://www.mot-art-museum.jp/blog/edu/>)にて随時レポート！  
 【お問い合わせ】tel.03-5245-4111 (代表 / 平日9:30-18:00)

**木村泰子 / YASUKO KIMURA**

大阪生まれ。1970年に教員となり、各校で教鞭をとる。2006年4月、大空小学校開校時に校長に就任。「すべての子どもの学習権を保障する」という理念のもと、教職員や地域の人たちの協力の下で学校づくりを行い、2015年3月まで同職を務めた。教師歴45年目の一昨年に退職、現在は全国で講演活動などを行う。著書に「『みんなの学校』が教えてくれたこと」「『みんなの学校』流・自ら学ぶ子の育て方」(ともに小学館)「不登校ゼロ、モンスターペアレンツゼロの小学校が育てる 21世紀を生きる力」(出口 汪氏と共著・水王舎)。

**郷 泰典 / YASUNORI GOH**

東京都現代美術館 事業企画課教育普及係長。1998年より日常生活におけるアート体験や作品と鑑賞者をつなぐために子どもを対象としたワークショップ・プログラムを企画し全国各地の美術館や学校、商店街、病院などで実施。2007年より現職。企画担当した展覧会「オバケとパンツとお星さま〜こどもが、こどもで、いられる場所」(2013年)。  
<http://www.mot-art-museum.jp/edu/>



# 子どもの可能性を広げる、 アートプロジェクト

子どもとアートに関わる8つのプロジェクトを紹介。美術館などの公共施設や、障害のある子どもの通うスペース、また障害の有無や年齢に関わらず誰でも参加できる実験的なプロジェクトなどの活動にも、子どもの可能性を伸ばすためのヒントが詰まっている。

【文】村岡俊也(1~2) / 佐藤恵美(3~8)

## 1

### 体が動くと、心が動く 横浜美術館〈子どものアトリエ〉(神奈川)

横浜美術館に併設される〈子どものアトリエ〉では、障害のある子どもたちのために“体感する”ことを目的とするプログラムが用意されている。絵の具や粘土を使いつつも、“アート”のためではない根源的な活動。横浜市内の本郷特別支援学校の子どもたちと一緒に、半日を過ごした。

【写真】福田喜一

#### 五感を開放するためのプログラム

「心地いいとか、あるいは心地よくないとか、どんな言葉で捉えているかはわからないけれど、自分の心が動くことを感じ取ってほしい。それが、美術のもとだと思うから」

1989年の横浜美術館開館当時から30年近く続けられている〈子どものアトリエ〉で、首席エデュケーターを務める山崎優さんは言う。週に3日横浜市内の学校や幼稚園などと連携して行われている「学校のためのプログラム」は、開館準備の段階で、5年間をかけて練り上げられたもの。幼児教育の専門家からアーティストまで、混成チームで作られたという。そのアクティビティのどれもが“体感”することを大切にしている。たとえば、テーブルや床のシートに準備された陶芸用の土粘土は、触ったり、足で踏んだり、好きなように遊んで良いのだが、重要なのは柔らかいこと。なぜなら柔らかさは、山崎さん曰く「手の動きを誘う」から。「手は“意思”によって動く」という考えのもと、プログラムには、その意思を引き出すための仕掛けが必ずある。

#### “触れる”ことから始まる対話

取材当日、本郷特別支援学校の子どもたち30名がやってきて、自由に場を楽しむ姿に見入ってしまった。大きなビニール袋に色付きの湯と透明な水を入れたウォーターベッドのようなものに抱きつくようにもたれて、うっとりとした表情を浮かべる子。少し動くと揺れるのが楽しいのか、体をゆらゆらと動かしている。あるいはただジッとしている子も、動かないことを選択しているように見える。何より気持ちよさそうで、表情が緩んでいるのがわかる。新聞ボールと名付けられたエリアには、引き裂いた新聞が山と積まれている。この柔らかさを出すために、手でちぎっているのだという。新聞紙にまみれるだけで、笑顔になることに気づかされる。ハイライトは、外のエリアで行われる絵の具遊びだった。床、壁、

ガラス、好きなところに好きなように描いていい。あるいは、描かなくていいのだ。水に溶け合って色が混ざっていく姿を眺めている子。絵の具など気にせず水遊びを始める子。足に絵の具をつけられて笑っている子。ガラスに水をかけて、ついた絵の具を落とすのに注力している子もいた。画家でもある山崎さんは、絵の具が原色であることも重要だという。色を混ぜることで新しい色が生まれることを知り、試してみようと動きを誘発するからだ。〈子どものアトリエ〉は、山崎さんのように“実技系”のスタッフによって運営されている。実際の制作を通して身についた、素材に対する感覚のようなものがアクティビティの中に生かされている。

#### 反応のキャッチボールのために

遊び上手の子もいれば、それほど動きの多くない子もいる。それぞれのスタンスで“いつもと違う環境”に向き合う姿は、言葉にならない感覚として、大人たちにも伝わってくる。その反応のキャッチボールこそが、〈子どものアトリエ〉の大きな狙いのひとつ。山崎さんは言う。

「体を動かさない子どもでも、あのお湯の入ったビニール袋の上に寝かせて、ゆらゆらと動かすと、瞬きもせずに反応しているのがわかるんです。自分で体を動かさなくとも、心が動いているのがわかると、先生方も私たちも嬉しいんです」  
頭で考えるのではなく、体が反応することで、心が動いていく。その姿は外から見ていても、とても微笑ましく、温かいものであることを知った。

引率をしていた本郷特別支援学校の先生も、子どもたちが開放的に楽しんでいた姿が印象的だったという。

「学校や家庭ではなかなかできないダイナミックな活動を楽しんでいたと思います。洋服に絵の具がついても気にしないで思いつき活動に没頭していましたから。自分から動くのが得意でない子どもたちも、開放的で自由な空間なので、心地よく過ごすことができたと思います」

本当ならば何度も訪れて経験を積み重ねることができたら、と話す先生もいた。横浜美術館〈子どものアトリエ〉の「学校のためのプログラム」は年間90日、横浜市内の幼稚園、保育園、小学校、特別支援学校などを対象に行われているが、幼稚園・保育園や小学校は、3~4年に一度参加できるかどうか。それに対し、特別支援学校は3年に2回の割合で受け入れがある。「できるだけ、必要とされているところに支援するべきというのが横浜美術館の姿勢です」と山崎さん。

「ここでの活動は、アーティストの育成を第一の目的にしている

わけではないので、すぐに表現することを求めてはいません。この子どもたちがその場に安心して居られるか、その環境づくりがまず大切なことだと考えています。みんなで集まって、みんなでやってみるということも大事なことです。人は、人との関わりの中で生きていくわけですから。誰もがそうですよね。子どもたちが生きていくために必要な力をつけるための手段として、アートを活用しましょうっていう考えなんです」

すべてのプログラムを終えて昼食を食べ終わった子どもから、光と音のスタジオと名付けられたスペースへと移動する。影絵のように投射された色とりどりの影を背景に、叩けば“いい音”がする見たこともない楽器が置かれている。キラキラと光るその場所で、お腹いっぱいまでどろむ子、ひたすら楽器を叩く子、走り回る子と、好きなことをして過ごしていた。

アートには、心を動かす力があって、「心を動かすことが、生きていることでしょうか？」と山崎さんは言う。子どもたちが遊んでいるのを見ていて、こちらの心が動くのは、アートの力かそれとも遊ぶ姿の素直さのおかげか。子どもたちは手を振りながらバスに乗り込んで、帰って行った。

#### 【Information】

##### 子どものアトリエ

小学校6年生(12歳)までの子どもたちを対象とした創造の場。年間を通じて、平日は横浜市内の教育機関と連携した団体プログラム、休日は親子や個人を対象とした造形や鑑賞のプログラムを実施している。

#### 【お問い合わせ】

##### 横浜美術館

神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1

tel. 045-221-0300(代表)

<https://yokohama.art.museum/education/children/>





みんなでつくる「お祭り」の時間  
NPO 法人芸術家と子どもたち（東京）



言葉を用いない人と人との関わりは、すべてダンスと呼んでいいのかもしれない。特別支援学校・東京都立鹿本学園で行われたアーティストによるワークショップは、子どもたちの自主性をできるだけ引き出すようなプログラムが組まれていた。とても示唆に富んだ、踊りの時間。その場に居合わせた人々が少しずつ互いを知るような、プロセスがそのまま作品となるような、コミュニケーションの場となった。  
[写真] 松本昇大

自由に自分を出せる場を作る

〈芸術家と子どもたち〉というNPOはその名の通り、アーティストを学校や児童養護施設へと派遣するコーディネーター（エイジアス）〈Artist's Studio In A School〉、その頭文字をとってASIASと呼ばれる彼らの活動は、現在では年間におよそ90カ所で行われている。中でも公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京と共同主催する〈パフォーマンスキッズ・トーキョー〉プロジェクトでは、東京都内の学校に声をかけ、各校約10日間のワークショップを展開している。代表の堤康彦さんは言う。

「子どもたちには元々、表現をすとか、面白いことをすとか、みんなと違うことをやってみるとか、そういう潜在的な能力があると思うんです。大人に怒られたり、周囲との関係を気にせず自由に自分を出せる環境を作れば、自然に伸びていくはずだと思ったのが、このNPOを立ち上げた理由です」

中でも障害のある子どもたちとアーティストたちは非常に「相性がいい」と堤さん。ある意味では過敏で繊細である彼らの感覚が、「隣の人と同じように見えているはず、という“当たり前”を、“本当は違うのかもしれない”と気づかせてくれる」から。世界のさまざまな見方や感じ方を提示することは、まさしくアーティストの役割の一つであるはずだ。

エネルギーのやりとりのために

「できるだけ自主性を引き出すような、アイデアが欲しかったんです」という教員たちの要望に応えるためにアサインされたのが、自身を体奏家と称するダンサー、新井英夫さん。ピンクの筒状の衣装で体全体をすっぽりと隠し、巨大なミズのような動きで教室に現れた。太鼓のリズムに合わせて子どもたちに近づき、筒状の衣装の中に子どもたちの顔や体を入れてしまう。その不思議な動きによって、あっという間に新井さんが“いつもとは違う空気”を作り出していく。

“筒”を脱いだ新井さんが、今度は風になって、葉っぱである子どもたちを押していく。肢体不自由な子たちにも、体に触り、また離れていく。さらにスカーフを使ったダンスへと子どもたちを導き出していく。普段は、車イスに座っている子どもたちを、マットに座らせ、あるいはウォーカー（歩行器）を使って輪の中心へと誘い出す。太鼓やカリンバ、さまざまな楽器のリズムに合わせて動いたり、動きを止めたり、大きな動きはなくとも、そこに“やりとり”が生まれていることがわかる。一歩踏み出した子どもに、教員たちから歓声が上がります。それは彼らの自主性が表現された証であり、普段とは違う動きをしていることを示している。新井さんは言う。

「僕が大事にしているのは、エネルギーのやりとりって言うのかな。風が吹いたら木がなびくとか、お日様が照ったら花がそちらを向くとか、そういうものに近い、その場の即興で出てくるエネルギーのやりとりを大事にしたいんです。そのためには目から入る情報だけでなく、音や圧、振動、あらゆる感覚を味わうことできたらいいなと思っています」

子どもの内面と繋がるチャンネル

風船のように膨らましたビニール袋の先に、押すと音がなるストローで作った笛をつけてある。体で押すと音が鳴り、同時に風船が震えて、少しずつ空気がなくなっていく。つい触りたくなるような仕掛け。たくさんのペットボトルと鈴を床に散らし、リズムをとるように子どもたちの体をポンポンと叩いたりもする。ついリアクションを求めてしまいがちだが、反応を求めること自体が一方的だと新井さんは考える。

「反応をしないっていうのも意志の表れだし、体で反応していても心の中が動いていればいいと思うんです。筋肉の機能として動けないお子さんたちでも、心はきっと動いている。動きや表情にアウトプットがないからといって、心がないっていうことは絶対ではないですから。それが大前提。その上で、いつもよりも目で追ってくれるとか、ほんの少し動かそうとしているとか、その少しの変化をこちらが見逃さない。こちらの感度を上げていくことで、子どもたちの内面と繋がるチャンネルができるような気がしています」

子どもたちを見て、「まるで自分のある部分を拡大しているようだなっていう感覚になる時がありますよ」と微笑むのは、子どもたちが自分たちの感覚に素直に従う様子を垣間見ることができるようから。

「普段はあまり動きのない子が、ウォーカーを使って僕のことを追いかけてくれるんです。彼は行きたいところに行く、しかも人と関わるっていうことに興味がある。それはまさしくダンスだと思うんです。彼らと一緒に過ごすことで、ダンスってなんだ？っていう根本的なところを僕自身も問い直すことができるんです。キレイに回れるとか、そういうことではないダンスの意味というか。できる・できないっていう価値観ではない世界の重要性を感じています」

連続9回のワークショップの最終回には一応の発表会があるとはいえ、技術的な向上が目的ではない。毎回、エネルギーの交流があればいい。右肩上がりの成長曲線ではなく、上がったたり下がったり、その変化自体を楽しむことができるかどうか。新井さん自身も新しい価値観や物の見方に気づかされている。

「まるでコミュニティの祭りを作っている感じ」と新井さんが語るの、ワークショップの1時間は、生徒たちと新井さんだけでなく、教員や空気を共有する人々みんなが作り上げるものだから。その場こそが、作品になっている。

[Information]  
NPO 法人芸術家と子どもたち  
現代アーティストといまの子どもたちが出会う「場づくり」を行う。1999年に発足し、2001年からNPO法人化。学校や施設などを中心に教育や福祉分野を横断して、アーティストによるワークショップを実施している。

東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F  
tel. 03-5906-5705  
https://www.children-art.net



# 3

## いろんな自由のあり方を提案する 児童デイサービス ペングアート(北海道)

15年前に個人のアートセラピー教室から始まり、現在は2つのスペースを持つ札幌市の放課後等デイサービス。通うのは、おもに小学生から高校生まで60名ほどの障害のある子どもたち。スタッフはアート、福祉、心理のそれぞれ専門スタッフがそろい、子ども一人ひとりに対し「いま何が必要なのか」を考えていく。

オリジナルの取り組みとして興味深いのは「アートガイド(制作手順書)」だ。絵の描きかた、工作のつくりかたなどを、細かい手順にわけてわかりやすく示している。このアートガイドに沿って手順を踏めば作品を完成させることができる。もちろんこの手順をふまなくてもいい。手順書を見て描く自由、選んで描く自由、好きに描く自由、と〈ペングアート〉ではさまざまな自由を提案している。

写真:高橋マナミ



[Information]

北海道札幌市豊平区美園2条5-4-6

tel. 011-841-3779

<http://www.peng.co.jp/>

# 4

## 心を遊ばせることのできるスペース ハート&アート空間 ビーアイ(宮城)



1987年に仙台で創造表現活動をする空間〈ハート&アート空間 ビーアイ(以下、ビーアイ)〉としてスタート。その名に「自分であれ(=Be I)」という意味が込められる。2歳の子どもから大人までそれぞれが、週に1回、時間と曜日を決めて通う。1カ月ごとに考えられるカリキュラムには、絵や立体の制作はもちろん、料理や外で自然と触れ合う体験も。「人、モノ、自然、言葉とどう出会うか」を大事に、一人ひとりが「どうしたいのか」を引き出せるプログラムを考えているのだそう。

「昔ここに通っていた子が大学生になったとき〈ビーアイ〉のことを「心の拠り所だった」といったんです。障害があるなしに関わらず、どんな子どもにとっても心を解放し、遊ばせることができる。そういう場所でありたいと思っています」と代表の関口怜子さん。

[Information]

宮城県仙台市青葉区立町20-11 ミカミハウス2F

tel. 022-262-2969 (日祝をのぞく10:00-18:00)

email. [zoukabako@gold.ocn.ne.jp](mailto:zoukabako@gold.ocn.ne.jp)

# 5

## 上野の9文化施設による、すべての子どもたちへのミュージアム体験 Museum Start あいうえの(東京)

「ミュージアムでの特別な体験をすべてのこどもたちに届けたい」という理念で、上野公園にミュージアムがさまざまなプログラムを展開する〈Museum Start あいうえの〉。参加するのは美術館、図書館、博物館、文化ホール、大学を含む9つの文化施設だ。

子どものミュージアム・デビュー体験を軸に、家族や学校にむけた数種類のプログラムを用意し、随時申し込みを受け付けている。家族向けのなかには、9つの文化施設をめぐるコツをマスターする「あいうえの日和」、各施設でのさまざまな鑑賞・観察・造形体験などを用意する「うえの!ふしぎ発見」などがあり、障害のある子どもには個別対応も行なう。また「ミュージアムトリップ」では、家庭等の状況により文化施設を利用しにくい子どもたちやその保護者を対象に、ミュージアムに招待している。

[Information]

Museum Start あいうえの

東京都台東区上野公園8-36東京都美術館内 交流棟2F プロジェクトルーム

tel. 03-3823-6921 (代表)

主催:東京都、東京都美術館・アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京藝術大学

<http://museum-start.jp>





# 6

## 教育に生きる、正解のないアート 対話で美術鑑賞「アーツ×ダイアログ」(東京、神奈川)

知識によらず、作品を見て感じたり考えたりしたことを言葉にする対話型の鑑賞プログラムが、東京・西東京市、神奈川・大和市の小学校で行われている。学校や美術館などでこのプログラムを行うのは〈NPO 法人芸術資源開発機構 (ARDA)〉。さまざまな機関と協力して芸術と社会をめぐるさまざまな活動を展開している。

1時間目は4~5人の少人数でアートカードを使ってゲームのように鑑賞し、2時間目は大画面で作品を見ながら対話していく。特別支援学級の子どもが参加することも。ファシリテーターの進行で自分の考えを自由に発言するこのプログラムは、どんな意見も認められる。なぜならアートは、計算や漢字のように一つの答えがあるわけではないから。このプログラムを終えたあとは、普段の授業ではあまり発言をしない子どもが、授業に積極的になることもあるのだとか。

**[Information]**

NPO 法人芸術資源開発機構 (ARDA)  
東京都千代田区内神田1-16-4 Future House lab.  
tel. 03-3518-9630  
<http://www.arda.jp>



# 7

## 子どもも大人も参加できるサーカスがリハビリに ソーシャルサーカス (神奈川)



ものづくりやパフォーマンスを通じて障害、国籍、年齢、性別などを越えた出会いや協働の機会を生む〈NPO 法人スローレーベル〉が、2018年より実験を開始した〈ソーシャルサーカス〉。同団体が2014年に開催した「ヨコハマ・バラトリエンナーレ」の経験から、パフォーマンスをつくるまでの練習やワークショップのプロセスに、心身のリハビリテーション効果があることに気づいたそう。

スローレーベルのこれまでの実績や海外の先駆的な事例をもとに、カナダの研究者らとともにワークショップやフォーラムなどを実施。「いろんなことに物怖じせずに参加できるようになった」という障害のある10代の子どもも。年齢や障害の有無を問わず誰でも参加できるサーカスが、「自己効力感」の向上や違いを生かし合う体験につながる。今後、公共施設や学校などでこのプログラムが育つことを視野に、活動を展開していく。

**[Information]**

【お問い合わせ】特定非営利活動法人スローレーベル  
tel/fax. 045-642-6132  
email. [pr@slowlabel.info](mailto:pr@slowlabel.info)  
<http://www.slowlabel.info>

# 8

## 好きなことを見つけてもらうために、待つ ボーダレスアートスペースHAP (広島)

1989年からのギャラリー運営のもと、「アート=療育」という思いから2012年に設立された放課後等デイサービス。現在は児童発達支援も含め、広島市内の3カ所でそれぞれ10名ほどの子どもが通う。約50名のスタッフは、ほとんどがアーティスト。美術に関する専門を生かしながら、子ども一人ひとりと丁寧に関わる。一口に「アート」といってもその表現はさまざま。映像をYouTubeにアップする子もいれば、ダンボールで立体作品をつくる子、トランポリンで飛び跳ねる子、ただ寝るだけの子もいる。

「時間の流れは人それぞれ違うので、待つことを大事にしています」と代表の木村<sup>しげよ</sup>代さん。何もしなくてもスタッフは待っている。子どもたちがやりたいことを見つけるまで。最近では、障害のある子どもに限らず、近所の子どもや大人が参加できるイベントやサークル活動も行っている。

**[Information]**

【お問い合わせ】一般社団法人Hiroshima Art Platform HAP  
広島県広島市中区上八丁堀4-1  
アーバンビューランドタワー公開空地内  
tel. 082-211-3260  
email. [gg@gallery-g.jp](mailto:gg@gallery-g.jp)  
<http://artspace-hap.com/>







## 太郎と直太郎。絵を描いて知る君のこと、僕のこと

3月の終わりに、麻布十番にある〈brownie and tea room〉にて行われた「TARO&NAOTARO」展。色の濃淡を自由に行き来し、線は大胆にリズムを刻み、気ままに踊るようなタッチの絵が会場を彩っていた。作者は2人の男の子。名前は太郎と直太郎。同じ5歳で、名前も似ている男の子が描いた絵は、それぞれが違う個性であることを恐れず、楽しむように存在していた。

[写真] 松原博子 [文] 菅原良美



矢部さんがデザインを手がけ、太郎くん直太郎くんの絵をまとめたZINE。これがきっかけとなって、麻布十番にある小梅さんのお店(brownie and tea room)で展覧会が開かれた。



写真左から、堀江直子さん、小梅さん、矢部綾子さん。



お店に入って左側が太郎くんの壁。

2017年の冬に出版されたZINE「TARO&NAOTARO」。5歳の太郎くん直太郎くんの絵で構成されたこの一冊をきっかけに、原画展が行われた。企画と制作に関わったのは、作者である太郎くんの母であり、ZINEのデザインを手がけたグラフィックデザイナーの矢部綾子さん、直太郎くんの母でスタイリストの堀江直子さん、展示会場(brownie and tea room)のオーナーである小梅さんも小学生の男の子を育てる母だ。子どもたちの個性や感性を尊敬しながら一緒に育むまなざし、一瞬で通り過ぎる姿を未来に残し、伝えていく3人の母たちに話を聞いた。

矢部綾子(以下、矢部):堀江さんとは、昔一緒に仕事をしたことがあって、知り合いでした。4年ほど前偶然会ったときに、子ども同士が同じ年だと知ってから何となく気になっていて。その後も共通の知り合いを通じて、子どももふくめて遊ぶ機会があって、仲良くなっていきました。直太郎くんの絵は、堀江さんのインスタグラムを見て、すごく良いので実際に見せて欲しいとお願ひして。そうして「TARO&NAOTARO」のZINEの制作が始まったんです。きっかけは、直太郎くんがダウン症だからという理由では全くなくて、ただただ“絵”に惹かれたから。子どもたちの絵が良いから、「こんなの描いているんだよ」って見せ合ううちに「なにか作れたらいいね」という話になったんです。

堀江直子(以下、堀江):インスタグラムは、育児のドタバタ日記のようになっているんですけど……(笑)。日々どんどん生み出される直太郎の絵が、母として胸にくるものが多かったの、思い出アルバムをつくるような感覚でアップしていました。それを気に入ってくれる知人も多くて。実際に、一冊にまとめたものを見ると、二人の絵がますます輝いて、ページをめくるたびにうっとりしてしまう。親ばかですよ……(笑)。デザインしてくれた矢部さん、この原画展を開いてくれた小梅さんに感謝の気持ちでいっぱい。

小梅:堀江さんと私は、知り合って20年ぐらいなのですが、いつも堀江さんの子どもに対する向き合い方が素敵だなと思っていました。直太郎くんがダウン症の子だからではなく、こうすべきだという型にはめずに、直太郎くんをみて、さあどうしようかと考える姿勢なんです。堀江さんのインスタグラムを見てみると、直太郎くんがものをひっくり返して部屋の中がすごいことになっていたり、お母さんとして本当に大変そうなんだけど、そういうすごく大変なことを、自分なりに工夫して楽しんでやっているので伝わってきて。直太郎くんが絵を描いているときもきつとそうだろうと思っていたので、ZINEを見たとき、純粋に「あ、いいな」と思ってすぐに、うちのお店で原画の展示がしたいと声をかけました。

矢部:小さい子どもって、障害がある・ないにかかわらず、何においても“差”が少ないと思うんです。この本を作ったのが約1年前なので、今よりもっと少なくて。今はもう5歳になるんですけど、私から見ると、太郎は1年前よりも描く絵がずいぶん変化してきていると思うところがあって。なので、小梅さんが「展示をしませんか」と声をかけてくれたとき、迷いました。太郎は

普段の生活の中でたまに絵を描くくらいだけど、直太郎ちゃんはまだ言葉を話していない中で、変わらず自然体で絵を描いている。そんな風に絵を描くふたりの差が開いてると考えたとき、やるべきかどうか迷ったんです。

小梅:最初、矢部さんは太郎くんの絵が変わってきているからどうか……って言っていたんですけど、私は新しく描いてほしいというよりは、このときのままだいいなと思ったんです。このときの絵をいろんな人に観てもらえたらって。

矢部:うん、展示を終えた今は、本当にやってよかったなと思っています。ZINEに載せているのは、太郎も直太郎くんも、大体3~4歳のときに描いた絵ですけど、それより幼い力がなくて絵にならなかつたりするから。ちょうど自分で描くことを意識ができて、かといって、外からの影響を受けすぎないところが抽出できているんじゃないかなと思います。いろいろなことに影響されず、誰に見られる意識もなく描ける時期って一瞬で通りすぎてしまう。5歳くらいに成長すると、具象的になっていく気がするの、太郎にも「これ描いて!」とお願ひされても、なるべく描かないようにしているんです。たとえば、私が犬の絵を描けば、太郎自身が犬でこういふもんだと思って描いてしまう。あまり外から影響をうけていない時期だからこそ、思ったままに描いた方がいいなって。

### 声を出すように絵を描くこと

堀江:直太郎が絵を描き始めたのは、私が世田谷にある〈アトリエ・エレマン・プレザン〉<sup>01</sup>へ見学に行ったことがきっかけでした。ダウン症の人のためのとても素敵なアトリエで、直太郎がダウン症だとわかってからずっと訪れてみたいと思っていたんです。ダウン症についての知識がまだ浅かったころは、漠然とした不安を抱えていたんですけど、あるときエレマン・プレザンの記事を読んだことで、不思議と「不安」が「楽しみ」に変わっていったんです。それで世田谷のアトリエを訪ねて、東京代表の佐久間寛厚さんともお会いすることができたんですけど、そこで佐久間さんから「ダウン症の人たちにとって、絵は“心の声”なんです」と教えてもらいました。早速、画材を揃えて直太郎に見せると、すぐに絵筆を持って、目をキラキラさせて夢中になって描き始めました。そのとき、直太郎は4歳になっていたんですけど、まだ言葉を話すことがほとんどなかったの、佐久間さんが言っていたとおり、本当におしゃべりしているようだったんですね。子どもが言葉を覚えると家族が喜ぶように、私も直太郎が一枚絵を描き終えると、新しい言葉が生まれたような気がして、毎回とてもうれしかった。6歳になった今でも、言葉はまだ少ないですけど、絵の声はたくさん聞こえてくるんです。だから、朝起きたとき、ふとしたとき、いつでも直太郎の好きなときに描ける状態にしておいてあげたいと思っています。でも、まだまだいたずらが大好きな小さな怪物のような時期なので、絵の具を思い切りひっくり返すこともあって、なんとか画材を固定できる方法はないかとずっと考え続けているんですけど。だから、壁にも床にも好きに描き放題のアトリエを作っただけで、いまの私の夢です(笑)。



矢部：そう、ちょうど展示が終わってから、そういう場が作れたらいいよねって話していたんですね。今回は、ダウン症の子もそうでない子もたくさん来てくれて、壁に貼ってある絵をみて、みんな刺激を受けるようで。テーブルの上に絵の具を置いていたから、どんどん絵を描いてくれて。それがすごくよかった。描きたい欲求ってどんな人にも根本にあるんだなあと改めて思いました。そういう解き放たれる場所が少ないから、作れたらいいよねって。

小梅：うんうん。あと、今回の展示で、以前から知っている菓子研究家のfoodremediesの長田佳子さんにお菓子をお願いしたんです。この展示の企画を考えているときになんとなく、長田さんにお菓子を作ってもらえたらいいなと思っていて。思い切ってお願ひしてみたら、長田さんから「昔ダウン症の子もたちにお菓子作りを教えていたんです」というお話を聞いて。テレパシー？すごい!? ってみんなで驚いたよね（笑）

矢部&堀江：そうだったね（笑）

小梅：今回の展示は、純粋に良い絵を観てもらう場に、同じ方向を見ている人たちが偶然にも集まったことが、すごくうれしくて。太郎くんはこの年齢だからこそ描ける純真な絵がいいなと思ったし、直太郎くんに対しては、ひたすら画伯だなあと感じていました（笑）。堀江さんは、あの画伯の姿を毎日ライブで観られるんだなって。色もすべて自分で選んで混ぜているというのがすごいなと。

矢部：うん。子どもって、描き込んでいくと途中から分からなくて、最後に塗りつぶして全部同じ絵にしてしまうようなところがあるから、直太郎くんの絵の色彩や余白、すごくいいですよ。

堀江：それはダウンちゃんの特徴なのかもしれないです。それも「アトリエ・エレマン・ブレザン」の佐久間さんに聞いたのですが、どんなアーティストでも作品を作る上で、終わらせ方が一番難しいそうなんですけど、ダウンちゃんたちは、その子の中で完璧なところに辿り着いたら“ピツ”と終わらせることができるって。そう言われてみれば、直太郎も、数秒でびよ〜と絵を描いてびつと止めます。

一同：へえええ!!

堀江：いつも心の中で「うわ〜!」って言ってます。絵を描いているときは一切口を出さないようにしているので、心の中だけで（笑）。

矢部：（笑）。きつと、もっと描き込む人もいるだろうから、それが直太郎くんの作風なんでしょうね。

堀江：直太郎が絵と出会ってから、ダウン症の人にますます興味を持つようになったんです。直太郎の絵を観ていると、光や呼吸、あたたかなものを感じて、いつまでも観ていたくなってしまふ。親だからというのとは違うような感覚で……〈アトリエ・エレマン・ブレザン〉で他のダウン症の人たちが描く絵にも同じものを感じるんですよ。直太郎は、6歳になったところですが、ゆっくりと成長するので、まだ手のかかることも多くて疲れてしまふ日もあるんです。健常児を“普通”と思って比べてしまうと、「まだできない」「まだこんなことをする」と、ストレスに感じてしまうこともあるんですけど、そんなときに直太郎の絵を観ると、常識やエゴから離れて、もっと彼の思いや声に近づきたいと思うんです。

## 僕が君をしっている

堀江：今、直太郎は一般の保育園に通っていて、園の中で障害があるのは直太郎だけなんです。でも、園児の中でダウンちゃんかひとりいるクラスってなぜか調和が取れることが多いらしくて。

矢部：それは本当にいいよね。うちの幼稚園は障害のある子を受け入れていないんだけど、受け入れて欲しいと思うんです。どうしたら受け入れられるようになるんだろう。

堀江：園の子たちはみんな直太郎のことを知ってくれていて。「なおちゃん、なおちゃん」って声をかけてくれる。いつものお友だち同士だったら喧嘩になりそうなことでも、「なおちゃんだ

けは許す」って言ってくれたり（笑）。先生も「みんなすごくなおちゃんに優しいんですよー」って教えてくれます。私もすごくうれしいし、お友だちにも先生方にも感謝の気持ちでいっぱい。

矢部：実際に、太郎は直太郎くんのことを全然不思議に思っていないんですよ。普段から、友だちの赤ちゃんや自分より小さな子と関わることも多いから、たとえば、直太郎ちゃんが物を落としてガシャーンって大きな音を出してもまったく動じないというか。今回の展示が始まる前、私から太郎に「直太郎くんは太郎と同じ年だけど、少し体が弱くて、まだ太郎と同じようにできないこともあるんだよ」って話を、少しだけしたんです。そしたら太郎が「全部分かってるよ」って。「最初に会ったときから分かっているし、友だちだ」って言ったんです。太郎は直太郎くんがダウン症だということは理解できてはいないけど、直太郎くん自身のことを意識して、自分なりに理解している。そうやって、自然と一緒にいられるっていうのが一番いいですよ。小さい頃から友だちでいられたら、大きくなって同じ気持ちでいられるかなって。だからずっと一緒にいられたらいいな。

堀江：太郎くん、本当にありがとう。すごくうれしい。

小梅：子どもたちは本当にすごいですよね。なんでもお見通しで。人に対してまったく分け隔てがないから、小さい頃から、自分の周りにはいろんな人がいるってことを肌で体験する環境があつてほしい。近くにそういう環境が多くあるほど、生きやすくなっていくんじゃないかなと思います。

矢部：うん、今回の展示を告知するときも、ダウン症という言葉を使わなかったけど、ダウン症の子が遊びに来てくれたのはすごくうれしかったですよ。

堀江：偶然なんだけど、ちょうど同じ時間にダウンちゃん3人が会場にいたことがあって、すごく不思議でした。

小梅：一人で子育てをしていくのは、とても大変なことだから、もっとみんなでいろんなことを共有していけたらいいですよ。

堀江：本当にそうですね。お父さんは仕事が忙しくて、どうしてもお母さんが育児の悩みをひとりで抱え込んでしまいがちで。でも、同じ価値観を持つお母さんたちと話をすると、新しい光や風を吹き込んでくれるので、大変だと思ってたことも、愛おしい瞬間だったんだなって気づかせてもらえる。それに、子どもを通しての出会いが素敵なご縁ばかりなんですよ。

今回、展示を観に来てくれたお母さんの中でも、壁に飾っていた直太郎が全身絵の具まみれになって自由に絵を描いている写真に反応してくれる人が多かったんです。「家が汚れてしまうから、こんなに自由に描かせてあげられていないな」「やらせてあげたくなつた!」って言ってくれたのが、とても嬉しくて。小梅さん、矢部さんも、おおらかなお母さんだからこそ、今回の展示会場も終始あたたかくてゆつたりとした空気が流れていて、幸せな場になりました。そういう場や繋がりが増えていくと、お母さんもお父さんもふと力を抜くことができ、みんなもっと子育てしやすくなるんじゃないかなと思います。

## 01 | アトリエ・エレマン・ブレザン

ダウン症の人たちが創作活動を行うプライベート・アトリエ。東京・経堂と、三重・志摩にアトリエを構える。<http://www.element-present.com/>

### [Information]

ZINE『TARO&NAOTARO』に関するお問い合わせは [info@kiddesign.org](mailto:info@kiddesign.org)まで。

〈brownie and tea room〉でも販売しています。

brownie and tea room

東京都港区南麻布1-3-15

Tel:03-3454-3786

<http://www.brownie-tea.com>



お店に入って右側が直太郎くんの壁。



展示会に合わせて、堀江さんが絵をあしらったTシャツやトートバッグ、ハンカチなどを、矢部さんがポストカードを、それぞれ制作して販売した。



展示会会期中、遊びに来た子どもたちがTARO&NAOTAROの展示に刺激されて描いた絵がたくさん。



# SHINICHIRO KUMAGAYA

## 障害のある子どもたちのこと

熊谷晋一郎（当事者研究・小児科医）

障害のある子どもたちに対して、社会はどう向き合っていけばいいのだろう。  
この問いに対してヒントをくれたのは、脳性麻痺という障害のある東京大学准教授の  
熊谷晋一郎くまがやしんいちろうさんだ。生きづらさを抱える当事者たちがその原因を探求する  
「当事者研究」に携わる研究者である熊谷さんが教えてくれた、私たち一人ひとりができること。

【文】小川知子 【イラスト】朝野ペコ





## 当事者研究以前に始まった、 当事者たちの運動。

子どもの話の前に、私が取り組んでいる当事者研究についてお話ししますね。「当事者」とは、障害のある人のことですが、当事者研究は何もないところから生まれたわけではなく、それに先立つ取り組みがあって、しかしそれでは足りなかったのが生まれたという歴史があります。

当事者研究に影響を与えた取り組みはたくさんありますが、大きくは2つに分けられます。ひとつは当事者運動といわれるものです。社会は、身体の特徴あるいは経験において平均的なマジョリティの体質の人向けにできているので、いろんなサポートが得られますが、マイノリティの体質の人は建物や道具のデザイン、価値観、社会規範という社会を構成するあらゆる側面が自分とそぐわない傾向がある。そうすると、一般の社会の中で他の人たちのようには暮らせないので、行く場所が隔離された施設が家庭の中にしかなくなってしまいます。両親亡きあと、社会の中で暮らしていくためにはどうしたらいいのか。当事者運動は、こうした背景と医学モデル的思考に対する批判から生まれました。つまり、障害のある人は、ノーマルとされているマジョリティへと訓練して自分を近づけなくてはいけない。変わるべきはマイノリティだと捉えているのが医学モデルの考え方です。そうではなく、社会の側が、社会を構成するあらゆるデザインをマイノリティにも有効なものに変えることが必要なんじゃないかと。

たとえば、身体障害など、比較的目に見えやすいマイノリティ性のある人たちは、社会に飛び込みさえすれば黙っていても身体がマイノリティ性を表現します。身体自体がアートであり、表現する媒体なんですよ。そういう人たちは、根性で社会に居続けさえすれば、モーゼ（の海割り）のように社会が徐々に変わっていくわけです。そういう彼らが勇気を持って当事者運動をしてきたという歴史があると同時に、その流れに置いていかれた当事者もいました。二分するわけではなくグラデーションなのですが、そうした人たちの多くは、黙っていたら表現が伝わらない、見えづらい障害のある人たちでした。

## 目には見えにくい自分の障害について、 自分で研究すること。

深刻さを過小評価されやすいというマイノリティ性とは、どんなものがあるでしょうか。聴覚障害もそうですし、発達障害、PTSD、LGBTもそうかもしれません。そして、見えづらい障害というのは、当事者自身からも見えづらいんです。なぜかわからないけれど、周りと同じようにできない。その理由が不明な場合、努力が足りない、意思が弱いんじゃないかというふうに、自分の人格を責め始める。そういう苦しさから当事者研究という、見えないものを見える化する取り組みが始まりました。当事者運動の思想は受け継ぎながらも、身体からマイノリティ性がほとぼり出していない当事者がまず表現活動をしないといけない。自分のことも相手のことも、お互いに同じ部分と違う部分を知らなければと。

なぜ「研究」という言葉を使うかというと、正解を知らないという前提に立つことを重視しているからです。かつて

は、専門家が正解を知っていて、正解を知らない当事者は専門家に従う、という医学モデルが正しいとされていた時代がありました。当事者運動を経て、当事者こそが正解を知っている専門家だと立場を反転させましたが、どちらも少し違う。当事者研究というのは、専門家も当事者も知らない前提から始まります。自分のこともよく知らないし、相手のこともよく知らない。当事者研究ではこれを前向きな無力さと呼んでいます。無力さを自覚したからこそ、知らない者同士膝を付き合わせて研究をしよう、と対等な形でテーブルにつくことができる。もう知っているから後は変えるだけというのが運動ですが、変える前には知らなきゃいけない。変える手前に留まるのが当事者研究の大事なポイントです。つまり、当事者運動から批判的に継承されたものが、当事者研究のひとつの側面です。

## トラウマと向き合ってきた、 依存症自助グループから学ぶこと。

2つ目に当事者研究が非常に重要なところを受け継いでいるのが、薬物依存症とアルコール依存症の自助グループの長い歴史です。こちらも、医療は何もできないと匙を投げたものでした。依存症の人は、多くの場合小さい頃に虐待を受けている、あるいは戦争という国家からの虐待を受けていることが多い。つまり、暴力の被害者である可能性が高いということが最近になって知られてきました。この暴力あるいはトラウマという側面に真っ正面から



向き合ってきたのが、自助グループの歴史です。被害者性は加害者性とニアリーイコール（ほとんど等しい）な部分がある。つまり、暴力に被害で巻き込まれているという現象にいていう上では同じなんですよ。これを当事者活動の中にもたらしたのが、依存症自助グループの歴史的に重要な意義です。

虐待や暴力を受けると人はまず、身近な人に依存してはいけないということを学習します。そうすると、物質、自分、カリスマなどへの依存が加速していきます。また、トラウマ記憶が頭の中に入ってくるので、自分が自分である根拠となる過去の記憶全般を遮断せざるを得なくなる。そのために覚醒度を上げるか下げるか、ワーカホリックになる。これは依存症あるあるなんです。専門家は、この6つの特徴をなんとか治そうとしてきたけれど、大事なのは2つでした。虐待は変えられない事実ですが、そこから派生する、身近な人に依存できなくなるということ、過去を遮断することが介入ポイントであると依存症自助グループが見抜いたんですね。

## 当事者運動と依存症自助グループの要素を ミックスして生まれた、当事者研究。

どちらかというと、未来に向かってどんどん突き進んでいく部分が強かった当事者運動に対して、自助グループは力点を過去に置いています。過去を振り返らない前向きさというのは非常に脆弱なところがあって、本当の前向きというのは後ろを向けることです。これは当事者運動も軽視してきたところでした。なので、当事者研究は、依存症自助グループが提案する回復プログラム「12ステップ」に象徴される、身近な人にもう一度頼れるということと、過去の棚卸しをしていくことを大事にしています。誠実に過去を振り返って、それを仲間と分かち合うという未来の展望を自ずから生み出す。トラウマがあると、それが起きた瞬間の前で時間軸に断層が生じて、物語が途絶えてしまうんです。それをもう一度1本のストーリーとして再構築する必要があるのですが、順序がとても重要で、現在、過去、未来の順とよく言われています。まずは、現在に安全な日常と住まい、人間関係を構築する。それまでは過去を無理して振り返っちゃいけない。でないと、フラッシュバックした瞬間、過去にワープしてしまうんですね。その人を引き止めてくれるのは現在の地場、まさに手を繋げる仲間がいるというリアリティが身体に染み込んで初めて過去を振り返れるようになります。

## 当事者たちの語りを発信していくことが、 社会を動かすことにつながる。

当事者という言葉よりも研究という言葉に力点を置く理由としては、無知の知と公開性という特徴があります。当事者運動に比べて、トラウマなどが非常にセンシティブなので自助グループのミーティングは、基本的には閉ざされた中で行われてきました。ただ、一歩外に出れば、社会の無理解にさらされる。そうすると、傷ついて再び依存してしまうという事例が後を絶ちませんでした。多くのマイノリティは社会基盤を変えないと救われない。当事者たちの語りを何らかの加工をして発信していかなければ社会は動かないんですね。自分たちのミーティングで作りに上げてきた表現を公開するところまでいって初めて、当事者研究と呼べるということで、自助グループと当事者研究の違いは公開性の有無であるとよく言われます。学会発表をしたり、世界に発信しなければ、研究とは呼べません。人類全体に公開して、人の目にさらして批評も受けながら練り上げていくのが研究ですから。

また、当事者研究は医療のセラピーのひとつとして誤解されやすいのですが、医療の限界からスタートした取り組みなので、医療の一環ではありません。目的は治すことではなくて、知ること。だから、治らなくてもいいという人しか参加しないほうがいい。当事者研究をする人も、ほかの研究者と同じように、生きやすくなることを目的に研究しているわけではありません。そこに謎があるから、不思議だから知りたい。知ること、結果的に生きやすくなるというものなんです。





## 障害のある子どもだった自分を救ってくれたもの

私には脳性麻痺という障害がありますが、私がまず救われたのは、当事者運動でした。恩人である先輩方が切り開いて継承してきたもの、そこで蓄積されてきた表現や実践によって私は生かされたという感覚があります。私が子どもの頃は、とにかく身体をノーマルに近づけるという医学モデルが信じられていたので、親の愛情もそちらに流されていくわけです。子どものことを思えば思うほどリハビリをさせなきゃいけない、それがこの子にとっては幸せなんだという知識の中で育てられました。当時は、ヨーロッパを中心とした専門家たちの間で、「脳性麻痺は治る」と言われていましたが、オイルショック後に、どの治療法も効果がないということが証明されました。これが、先ほどの無知の知のスタートですね。医療が正式に敗北を認めたことが、私たちにとってはものすごい恵みだった。私の身体が悪いのではなく、社会環境が問題なんだと180度視点が変わった。ようやく生きていけると思いました。

また当事者運動が、「医学モデルである優生思想（※優秀な能力を持つ者の遺伝子を保護すべきとする考え）に毒されている親も被害者であり、真の加害者は社会全体だ」と謳ったことは大きかったですね。親はただ養育責任を課せ



られるという重圧の中で、愛情と無意識に内在する差別意識が渾然一体となってスティグマ（※ネガティブなレッテル）が濃縮してしまう。だからこそ、日本の障害者グループの先駆けである「青い芝の会」の横塚晃一氏が、「泣いても詫びても親の愛情を蹴飛ばさなきゃいけない」と言ったことで、親から注がれている愛情を否定していいんだと思うことができました。彼は「愛と正義を否定する」とも残しています。愛も正義も少数派を排除した多数派の論理で作動してしまっているのです。よきものとされるんですよ。だからこそ立ち向かうことが難しいけれど、まずそこを疑ってかかれと。そうした言葉に救われて、私もようやく息ができるようになりました。

## 親以外の縦のコミュニティとの出会いが、生きる力になる。

私の場合は、父親が学生運動をしていたのですが、仕事は市役所の職員として障害者福祉課で障害のある人の

対応をしていたんですね。80年代になると、社会運動が盛んになってきて、異議申立ての窓口対応をしていた父は、平日は過激な障害のある運動家に頭を下げながら、休日になると彼らと中学生の私を引き合わせてくれました。僕はここで出会うわけです。言わば、反社会的な悪い先輩たちに（笑）。

当事者のコミュニティに受け継がれている思想や系譜は、横軸だけではなく、縦軸もあるんです。当事者同士のコミュニティにも縦軸があって、上の先輩たちの背中を見ながら受け継がれるもので、ようやく息が吸えるようになることがある。ここで重要なのが、フラットな関係ではないということ。彼らが語っていた言葉や実践は、オルタナティブな縦軸として流れ込んできました。自分よりも重度の障害のある人たちが生き生きと生活している。家も出てアパートを借りて、施設にも入っていないし、デートしたり子どもが生まれたり人生を謳歌しているらしい。子ども心に詳細不明ながらも、親以外の人が介助をして生活が成り立っているという先輩たちの背中以上のエビデンスはありません。オルタナティブなストーリー、ナラティブ（※自分について物語ること）を先輩の障害者から教わって、こんな状況定義があるんだと思えた。自分の人生をこんなふうに語り直していいのか、というナラティブ資源みたいなものがたくさん流通していることが大切なんです。家庭の中の密室にいた頃はナラティブの資源を手にするのができなかったで、自分の表現し難い不安を言語化できませんでした。

人は、理念や理想を掲げて初めて、生きられるところがあります。一方で、等身大の当事者の語りというのはもっと苦しいものです。つまり、縦軸の系譜で受け継がれてきた当事者のナラティブと、それには含まれない生々しい今を生きる当事者たちの横軸のナラティブ、その両方がある初めて全貌が見える。今は、健常者は縦軸があるけど、当事者には横軸しかないという風潮が若干出ていますよね。縦軸は悪いもので横軸は美しい平等なものだと、縦軸は見逃されてきました。でも、やっぱり当事者には当事者の獣道があって、先人たちの歩んできた足跡がその道を照らしてくれているんです。照らすものがあって初めて希望というものが湧く。縦横のナラティブをどんなふうに後世に受け継いで、拡張していくかがとても重要なんです。

残念ながらナラティブは自分の中からは生まれず、共同性の中からはしか出てこない。縦横揃って初めて生まれるので、そこをつないでおくことが切実に求められる。そういう場所を作るサポートをすることも、周囲ができることもできません。

## 依存先を増やしていくために、私たちができることってなんだろう？

幼少期のネガティブさは、依存先が限られていたということから生まれる部分が多いんです。生きていくためには24時間誰かの介助が必要になるわけですが、それが親だけに独占されている状況だと、親のご機嫌をとらなくてはいけなくなり、依存が加速してしまう。なぜならその人に見捨てられたり、死んでしまったら生きていく術がないからです。一人暮らしをしたとき、先輩が「30人は介助者が

いないと駄目だ」と言いました。その理由は、人間は定期的に不機嫌になったり暴力的になったりするんで、1人の人が暴力的になったときに残り29人いれば、その人との関係を解消できると。腕つぶしの強さでは圧倒的に弱い私たちが、弱いままでも対等に尊厳ある暮らしを保つためには数で勝負するということ先輩から学びました。人数比というのは決定的なんです。障害のある当事者が家庭でも施設でもなく地域にこだわった理由のひとつは、人数比です。依存先がたくさんあるということを実現する可能性のある場所は、地域しかない。地域もまだまだなんですけど、家庭や施設では人数比的に生存基盤として自分の意思が尊重される暮らしが成立するという事は、あり得ないですね。

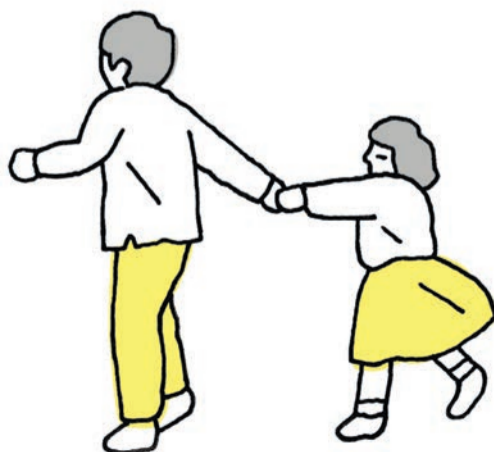
では一人ひとりが依存先を増やすためにできることのひとつに、インフラの面の整備があります。愛というものは排他的で、独占性を生むので生存基盤に直結してはいけません。生存以上のところで豊かなものであってほしいで



すが、生存基盤が愛だけでは怖いです。極端に言えば、依存先を社会化、市場化する必要があります。独占や寡占というのは市場の失敗ですよ。そういう意味で、すべての人のニーズが無視されないためにはどうしたらいいのか、というのは市場経済学が考えてきたことなんです。これを引き続き、しっかり考えていかないといけない。これは障害者の問題だけではなく、誰にとっても依存先がたくさんあることは大切なこと。そのために財政はどうしなければいけないのか頭の中で整理して、投票行動につなげていくことが重要です。自分が依存先のひとつになれるような振る舞いを一人ひとりが考えることも、必要になってくるかもしれません。

## 差別意識を社会から減らしていくために。

下部構造にある依存先を増やしていくことと同時に、上部構造、意識の面でスティグマを減らすことも周りの人ができることの一つです。さっきのナラティブと深く関わるのがスティグマ（※差別や偏見）ですね。障害者やLGBTなどの集団をグループ化するカテゴリーに対して、ネガティブなレッテルを貼る社会現象のことをスティグマと呼びます。これは、インフルエンザのようなもので、生まれたての赤ちゃんはスティグマを持たないので、後から学習するんですね。まずは、人の差別的な言動を見て感染する。2段階目としてカテゴリーの典型的なタイプを頭の中で作り上げてしまう。3段階目として、偏見が出てきて、そのイメージに対してネガティブなレッテルを貼る。ここまではま





だ潜伏期間。人にウイルスをまき散らす4段階目を、差別と呼びます。それは、行動として表出したスティグマであり、人に影響を与えるもの。スティグマ現象というのはその属性を持っている人を殺しかねないものなので、今は特定の属性に対するスティグマをどうやったら減らせるのがWHOをはじめとする専門機関にとって最優先課題のひとつとなっています。

差別は行動として表れたら罰することができるのですが、法律には内心の自由という制約条件があるので、潜伏期間には介入できません。法律は1/4だけに対応できるので、3/4はどうするかというと、広い意味での教育のようなものが必要になります。では、どういう教育カリキュラムが必要になるのかを世界中の人たちが研究しているのですが、シンプルな結論に到達しつつあります。それが、当事者のナラティブを聞くということ。ただし、身近にいる家族や支援者、専門家は、当事者のナラティブをずっと聞いてきていますよね。でも、統計データによると、近親者がスティグマの発生源になっていることが多い。要するに、よく知らない人たちは差別意識を持っていないんです。家族や支援者のように利害関係が生じている人が憎しみや恨みを持ったりするからこそ、スティグマが発生して世の中に広がっていく。どうやらナラティブはシンプルじゃないらしいということも徐々にわかってきました。私たちが当事者研究でまさに研究しているのが、どのようなナラティブが、どのような出会い方をすればスティグマを減らせるのか。もう一步踏み込んだ人類分析をする必要性があります。

### 正直なナラティブに触れられる場としての、芸術作品。

先行研究としてナラティブを3つに分類した人がいます。ひとつ目は社会に対する異議申立てタイプのナラティブ。当事者運動的な語りですよ。2つ目は、上から目線

の教育的な語り。3つ目は、自分の身に起きたことを正直に語る自伝的ナラティブ。どれが一番周囲の人のスティグマを減らしたのかというと、自伝的ナラティブなんです。正直に自分の経験を語ることが、本人にとっての自助グループのような意味での回復につながるだけでなく、それを慎重に開示していくことがスティグマを減らす効果も発揮するかもしれないという仮説を立てて今リサーチをしているところです。

自伝的ナラティブは、本や映画などの芸術作品が勝負していることと、すごく似ていると思います。芸術作品も、当事者研究と同じように、個人の安全性を配慮した上で社会を動かすために少しだけリスクを取りながら表現しているのしょうから。



熊谷晋一郎 / SHINICHIRO KUMAGAYA

東京大学先端科学技術研究センター准教授、小児科医。新生児仮死の後遺症で、脳性マヒに。以後車いす生活となる。大学時代は全国障害学生支援センタースタッフとして、障害のある人々の高等教育支援に関わる。東京大学医学部医学科卒業後、千葉西病院小児科、埼玉医科大学小児心臓科での勤務、東京大学大学院医学系研究科博士課程での研究生生活を経て、現職。専門は小児科学、当事者研究。主な著作に、『リハビリの夜』(医学書院)、『当事者研究と専門知』(編者、金剛出版)などがある。

## ドキュメンタリー映画 『いろとりどりの親子』

11月17日(土) 新宿武蔵野館ほか全国順次公開



### “違い”に向き合う親子のナラティブと出会う

正直な誰かの物語=ナラティブに触れられる場は、映画館にもある。たとえば、さまざまな“違い”を抱える6組の親子の生活とインタビューで構成されたドキュメンタリー映画『いろとりどりの親子』もそのひとつだ。本作は、自分たちとは異なる性質を持つ子どもを育てる親と、親との“違い”を持つ子どもが直面する困難。その経験から得られる喜びについてのプロセスを丁寧に、ゆっくりと映し出す。この映画の原作者であり、6組のうちのトップ・バッターとして登場するノンフィクション作家アンドリュー・ソロモンは、親の描く幸せの価値観のもとでLGBTである自分を否定し、治療しようとした過去について、自分を傷つける行為だったと振り返る。そして、「治療すべきものと祝福すべきものの境目はどこにある?」という問いに挑んでいく。

原作は、ニューヨーク・タイムズ紙ベストブックなど、国内外50以上の賞を受賞し、24カ国語に翻訳され、世界中で大ベストセラーとなったノンフィクション本。自分がゲイだと打ち明けたとき、ゲイである息子を受け入れようと苦悩する両親の姿に直面したことをきっかけに、アンドリューは、「ほかの親子が互いの“違い”にどのように向き合っているのか?」を検証し始める。10年をかけて、彼は身体障害や発達障害、LGBTなど、たとえ親子であっても根本的な“違い”を抱える子を持つ300以上の家族に取材を行い、900ページにもわたる『FAR FROM THE TREE: Parents, Children and the Search for Identity』を完成させたのである。

「蛙の子は蛙」とは限らない。その始まりから互いの“違い”を受け入れ愛する方法を、時間をかけて見出してきた家族の嘘のない物語は、凝り固まった常識や普通という思い込みの壁をはがし、心地のよい温かな空気を運んでくれる。

監督:レイチェル・ドレッツィン

原作:アンドリュー・ソロモン

『FAR FROM THE TREE: Parents, Children and the Search for Identity』

音楽:ヨ・ラ・テンゴ、ニコ・ムーリー

2018年 アメリカ / 英語 / 93分 / アメリカンピクスタ / カラー / 5.1ch

原題:Far from the Tree / 日本語字幕:高内朝子

提供:パップ、ロングライド 配給:ロングライド

©2017 FAR FROM THE TREE, LLC



# 子どもと読みたい、 ダイバーシティな読書案内

子どもと一緒に読みたい、ダイバーシティを紐解く物語を紹介。  
案内するのは、1冊の本しかないお店〈森岡書店 銀座店〉を営む森岡督行さんと、  
東京・中野にある〈東京子ども図書館〉の司書・清水千秋さん。

## 森岡書店(東京)の3選



「ダイバーシティ」とはいったいどんな意味なのでしょう。検索すると、性別、人種、国籍、宗教、年齢、障害等の差異を受け入れる、あるいは、多様性が出てきます。しかし、どんな分野でも、違いを理解しあうのは、けっこう難しいのも確かなこと。ではどうすればよいか。私は「愛」にこそ、それを解く鍵があると考えます。人間が素朴に持つ「愛」という感情。いま「ダイバーシティ」が求められているなら、根底には、それがあってしかるべきです。「愛」にこそ人間の違いを肯定する力があると思います。そこで今回は、自分が子どもに読みかかせた経験上、「愛」を伝えている絵本を3冊選んでみました。

[文] 森岡督行



**森岡督行 / YOSHIYUKI MORIOKA**  
1974年生まれ。著書に『荒野の古本屋』(晶文社)などがある。企画協力した展覧会に「雑貨展」(21\_21 DESIGN SIGHT、東京)、「そばにいる工芸」(資生堂ギャラリー、東京)などがある。2018年には「shiseido art egg」賞の審査員を担当した。

## 『ともだちのしるしだよ』

カレン・リン・ウィリアムズ【作】、カードラ・モハメッド【絵】(岩崎書店、2009年)



アフガニスタンの難民キャンプ。そこで知り合う2人の少女。2人には、ともに戦争で家族を亡くした経験がありました。履く靴もありません。ある日、1足のサンダルが救援物資として入ってきたとき、2人は、1足ずつ履いて「ともだちのしるし」にします。しかしひとりにはアメリカに行くことに。

お別れの日、涙を浮かべながら、お互い1足ずつ持ち合うことを決めます。サンダルには、長く忘れていた「愛」が込められていたのです。ささやかながら、だからこそ、大きく育っていく「愛」の可能性が感じられます。

## 『ともだちをたすけたゾウたち』

わしおとしこ【作】、遠山繁年【絵】(教育画劇、2002年)



多摩動物公園で実際にあったことを題材にした物語。病気のゾウは、薬をあけても受け付けず、注射をする事も難しく、飼育員もどうすることもできません。ゾウは病気の時はずっと立っています。そんなある日、病気のゾウを2頭のゾウが、両側から立って支えあいます。雨の日も風の日も、そ

れは1カ月も続きました。そして病気は回復。弱者を支えようとするゾウの気持ちは、子どもばかりでなく、大人にも十分に伝わってきます。弱者を支えることが大切なのは当然ですが、その姿が美しく尊いということも付け加えておきたいところです。

## 『ちいさなあなたに』

アリスン・マギー【作】、ピーター・レイノルズ【絵】(主婦の友社、2008年)



もし子どもがいたら、この絵本を読んだとき、生まれて初めて対面したときのことを思い出すでしょう。泣いていたこと、息をしていたこと、眠っていたこと。その愛おしさ。あるいは、自分の親がきっと感じたであろう自分への愛を知るかもしれせん。そのおもいは自分だけでなく、全ての人間に共

有したものだと気付くとき、私たちの前に希望があらわれます。そこに「ダイバーシティ」が現実のものとなって立ち現れてきます。人間の持つ愛を実感できる絵本。

## 東京子ども図書館(東京)の3選



人は誰もが自分という“物語”を生きていますが、それは幼い子どもも同じです。生きることが困難な現代において、子ども時代にたくさんの物語に触れ、その先にある“幸せな結末”“幸せな未来”のイメージを自分の中にとっ取り取り込むことは、必ずやその子の助けとなるはず。そんな物語をご紹介します。

[文] 清水千秋



**清水千秋 / CHIAKI SHIMIZU**  
学習院大学法学部・経済学部図書センター勤務を経て、2002年より、公益財団法人 東京子ども図書館職員となる。児童室や分室のかつら文庫等の担当のほか、子どもの読書に関わる講演講師を務める。

## 「愛蔵版おはなしのろうそく」シリーズ

(東京子ども図書館)



世界各地の昔ばなしや創作物語のほか、手遊びやわらべうたを豊富な挿絵とともに収めたシリーズ。むかし、ある夫婦が3人の女の子を森に捨てると、そこには人食いの大男が。殺されそうになったところを、一番年下のモリーの機転で逃れる話(『エバミンダス』所収「かしいモリー」イギリスの昔ばなし)、カラスに変えられた7人の兄さんたちを救おうと、妹が太陽や月、星のもとを訪ねる旅に出る話(『だめといわれて

ひっこむな』所収「七羽のカラス」グリムの昔ばなし)など。シリーズは、『エバミンダス』『ついでにヘロリ』『だめといわれてひっこむな』など全10冊。いずれも、東京子ども図書館の職員がお話を覚え、子どもたちに直接語りかける活動を通して、選ばれた物語ばかりです。どの子にも当てはまる普遍的なメッセージが込められている昔話から、いろいろなタイプの主人公の冒険に身を委ねてほしいものです。

## 「世界のともだち」シリーズ

(偕成社)



『ルーマニアアナー・マリアの手づくり生活』から、『ウスベキスタン―シルクロードの少年サブラト』まで全36巻の写真絵本シリーズです。長倉洋海、小松義夫、石川直樹ら第一線で活躍する写真家33名が、各国1人の子どもの密着取材。家庭や学校での様子を追った写真と平明な文章で、日々の暮らしや行事、風物等をひとつの物語のように伝えています。被写体の子どもは10歳前後。親しく交わった写

真家ならではの打ち解けた表情が印象的です。色鮮やかな写真の数々を、アルバム風にレイアウトしているので、仲良しの子の家のをのぞくような感覚で読み進めることができます。国も文化も家族構成も親の仕事もさまざまな、同世代の子どもの日常を知ること、世界の国々や人々の多様なあり方に触れてもらいたいと思います。

## 『ちいさいおうち』

バージニア・リー・バートン【作・絵】、石井桃子【訳】(岩波書店、1965年)



静かな田舎の丘の上に建つ“ちいさいおうち”を主人公にした、1942年刊行のアメリカの古典的絵本です。“ちいさいおうち”は、移り変わる季節を楽しみながら、幸せに暮らしていました。時々、遠くの町のあかりを見て、「まっちゃん、どんなところだろう。まちゃん、すんだら、どんなきもちがするものだろう」と思っていました。年月が経つにつれ、開発の波にのみこまれ、気がつけば、大都会のまん中に、

ひとり残されてしまいます……。四季の変化を細やかに描いた絵が美しく、時の流れという目に見えないものを、幼い子にも分かるように見せてくれます。私自身、幼い頃に繰り返し母親に読んでもらったときの静かな感動が、今でも深く心に残っている絵本です。ぜひ、大人が声に出して、身近な子どもに読んであげてほしいと思います。



# アートの境界線に立つ

アートを観る、創る、体験する、学ぶその時、意識に立ち現れざるを得ない「アートとは何か?」という問い。額縁がつけられ、美術館に収められ、ホワイトキューブの中に並べられる作品だけがアートなのか。そのボーダーの上に立ち、日々考える人々に聞く。

藤 浩志 [美術家]

表現とは「何かを伝える」よりも「何かとつながる」ための行為

[構成・文] 井出幸亮

## 地域社会に関わる中で感じた驚きと喜び。

両親が鹿児島市内で大島紬おおしまつむぎの会社をやっていたので、普段の生活の中で、糸を紡いだり、織ったり、染めたりというものづくりの行為を身近に見て育ちました。それで京都の芸術大学で染織せんしよくを学んだのですが、当時は1970年代の終わり頃で、高度経済成長後の生活様式の変化によって、日常の中で着物を着るということがなくなっていた時期。僕らがやっていた染織も、生活の中で使うためよりも、「作品」として工芸の展示会に出すために作るということが当たり前になっていて、そのことに何となく腑に落ちない気持ちがありました。また、社会が産業化されていく中で、ものを作る人／買う人が切り離されて、生活の中にあつたものづくりが消えて行く中、芸術大学では西洋からの「輸入文化」としての近代美術が主流で、その背景が日本人の生活から切り離されているということに違和感を抱いていました。

在学中に作った最初の作品は、「京都・三条の鴨川の中に自作の鯉のぼりを設置する」というもので、いざやろうとすると、川の管理者がいたり、法的な問題があつたりして、なかなか簡単にいきません。設置したのですが、府の土木局によって撤去されてしまいました。しかし、それを京都在住の哲学者・梅原猛うめはらたけしさんが「作品を無断で撤去するのはよくない」と抗議してくださり、お咎めを受けることは免れました。そういう経験から、地域社会の中に関わって何かをやると、摩擦も含めて、思いもよらないことが起こるんだと知って、そのことに驚きと喜びを感じました。

その頃、ドイツのアーティスト、ヨゼフ・ボイスが「社会彫刻」という概念を唱え、1982年の「ドクメンタ」でカッセル市内に7,000本の檜の木を植える緑化運動そのものを作品とするプロジェクトを行っていて、その活動に、僕らのような日本の若いアーティストや美大生たちが触発されたという面がありました。環境汚染や貧困などの社会問題が広がり、多くの苦しんでいる人がある中で、自分たちはアートの世界の中だけで考えているだけで良いのだろうか、という問題意識もあつたと思います。



「金沢21世紀美術館」で行われた「かえっこ」の様子。

そんな中、「新しいパブリックアートの形」を模索していた僕は、1989年に鹿児島の実家を改装して「Eスペース」というオルタナティブカフェを始めました。僕はもともとコミュニケーションが少し苦手なところがあり、心の中に言葉にならないもどかしい思いがあつて、うまく話せず、家族との会話が苦手だったんです。実家に帰るのも好きではなかった。だけど、家族と共にカフェを運営していくとなると、やはり話

さざるを得ませんよね。設備のこと、メニューのこと、アルバイトのこととか……また日々の運営の中でいろいろな問題も起こります。そうした中で、問題を共有し、一緒に作業することで、親子の関係が変わっていくんですね。またそのカフェに、お客さんや地元のアーティストたちなどの多様な人が集まって来たことで、人間関係も変化します。両親や姉も元気になったし、僕自身の活動に対しても理解が深まった。家族の中に「他者」を導入することで、日常を超える関係が生まれるんだということに気付かされました。

## 「かえっこ」で子どもたちに日常を超えた関係性を生む。

2000年には、「かえっこ」というプロジェクトを始めました。各家庭でいらなくなったおもちゃを使い、「カエルポイント」という「子ども通貨」(遊びの通貨)を使って、地域にさまざまな活動を作り出すワークショップです。これは僕の子供が小学1年生の頃、福岡のフリーマーケットで、「かえっこショップ」としていらなくなったおもちゃを交換する店を開いたことがきっかけでした。「お店やさんごっこ」のようなもので、子どもたちもスタッフとして一生懸命働いた。これは面白いなと思って、子どもたちのいらなくなったおもちゃが世界中に循環し続けるしくみとして、本格的にやってみようと考え、「かえっこカード」を導入して、試行錯誤を始めました。

「かえっこ」は当初からフリーソフトウェア(多数の人々に使用されることを目的とし、利用者が自由に使用・複製・改変などを行うことができるソフトウェア)のようなイメージで、どこでも自主的に同じような活動ができる仕組みとして考えていました。2001年に「全国かえっこの旅」として、全国各地の学校や保育園、商店街、公園、公民館、美術館など、さまざまな地域で行っていった結果、その活動がどんどん広がっていききました。僕らが直接、関わることなく「かえっこ」をやる地域も増え、今でも毎週末、全国のどこかで誰かが「かえっこ」をやっているというくらいになって、近年では海外にも広がっています。

「かえっこ」はただ廃棄物のリサイクルというだけでなく、子どもたち同士のコミュニケーションを促す活動であることが大切です。バンクマン(銀行係)の役割の子もいれば、ディールコーナー(値付け所)で値付けする仕事の子もいる。お互い面識のない、年の離れた子どもたちが、同じ場所で仕事をして、おもちゃを手に取りながら「これかわいいね」「これ何に使うのかな」などと話すことで、他者同士のコミュニケーションが生まれる。作業の過程で会話が發生して、新しいつながりが生じるんですね。

そんな風に、日常性を超える瞬間によって、何かとつながり、関係性を変えていく行為。それを僕はアートと呼びたいと思っています。アートというと、作品があつて、展示会があつて……というフレームをすぐ想像してしまいがちなのですが、本来、人間の日常生活の中には作品も展示会もないはずですよね。たとえば絵画なら、描いたものの画面、つまり「結果」に目が行きがちなのですが、本来はその「過程」、つまり「作っている時間」の質を変化させることが大切な気がするんです。一般的に美術教育の場では、表現することは「何かを伝える」ための行為だと教えられますが、僕に言わせれば、表現とは「何かとつながる」ための行為。つながる



2000年から始まり、現在では全国各地で独自に開催されているワークショップ「かえっこ」の現場。

ことで、自分の日常や常識を越えようとしている。その態度そのものが美しいと思うんです。

僕は障害者とそうでない方が芸術活動を通じてつながる「ポコラート」の活動にも関わっていますが、そうした分野でもやはり「つながり」が大事だと感じます。障害者の方の制作活動には、多くの場合、支援者の方が関わっておられるわけで、それはある意味ではコラボレーション、「コレクティブワーク(共同作業)」だと言えると思うんです。ですから、支援者自身も作家としての自覚を持って取り組むことで、もっと深い表現が出てくる可能性があるんじゃないか。



また、作品を制作してどこかに展示してお客さんに見てもらうだけじゃなくて、メディアを作ってもいいし、イベントを行ってもいい。もっと多様なリリースの仕方が考えられる。彼らが「どこにつながろうとしているのか」を探ることで、彼らの性質を最大限に生かせる状況を用意する、そういうことを模索していくことが大切なんだと思います。



藤 浩志 / HIROSHI FUJI

美術家。鹿児島県生まれ。1979年京都市立芸術大学美術学部工芸科染織専攻に入学し、85年同大学院美術研究科修了。地域をフィールドとした表現活動を志し、全国各地の現場でプロジェクト型の表現を模索。同大学院修了後バプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と社会学に出会い、バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用したデモンストレーション型の美術表現により「対話と地域実験」を実践。十和田市現代美術館館長を経て秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科・アーツ&ルーツ専攻教授・副学長。

<https://www.fujistudio.io>

井出幸亮 / KOSUKE IDE

編集者。1975年大阪府出身。旅や文化・芸術を中心に雑誌、書籍その他の編集・執筆活動中。



# THE OUTSIDE IN ART

## Dr. ロジャーのアートレクチャー

「アウトサイダー・アート」の生みの親、ロジャー・カーディナルから  
アートを学んだキュレーター、ロジャー・マクドナルドの  
新連載がスタートします。アートの主流からは、ちょっとはずれた  
オルタナティブな視点で、過去から現在、時代を自由に行き来しながら  
アウトサイダー・アートを紐解く誌面上のレクチャー。  
全6回でお届けしていきます!

[構成・文] 石田エリ [コラージュ] ガイ・ネイマン



## 第1回「子ども」

近年、心理学・脳科学の分野ではよく耳にすることですが、子どもにエゴ（自我）が芽生えるのは4歳からなんだそうです。エゴというのは理性や規律のことを言いますが、大人になるにつれて脳の中にもだんだんと秩序が生まれてくる。その始まりが4歳ごろ。それまではというと、脳内のあらゆるパーツが柔軟で、パーツ同士で話がしやすい状態にあると言われています。これは、子どもの絵の面白さが脳科学的にも説明がつくようになった、ということでもあるのではないのでしょうか。レクチャーの1回目は、「子ども」という視点で、アートの歴史を眺めてみたいと思います。

### 子どもや部族のアートを同列に捉えた「青騎士」の思想

遡ること100年ほど前。ドイツ・ミュンヘンにて立ち上がった「青騎士」という表現主義の画家たちによる芸術集団は、子どもの絵画に着目していました。青騎士の中心人物だったのは、ワシリー・カンディンスキーやフランツ・マルクなど。彼らは、1912年に年刊芸術ジャーナル誌「青騎士」を出版し、ミュンヘンで展覧会を開きました。そこでは、自分たちの作品だけでなく、部族芸術や農民芸術、フォークアート、そして子どものアートが混ざり合って展示されていました。

この時代、第一次世界大戦の前後は、西洋のアートシーンは可能性にあふれたかなりカオスチックな時代でした。パリでは、パブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによって、幾何学的に描く手法「キュビズム」が起こり、イタリアでは「未来派」、スイスでは「ダダイズム」といった芸術運動が盛んになり、「アヴァンギャルド」（前衛芸術）の時代へと向かっていく。こうした芸術運動の根底には、大きな壁となって立ちのぼるアカデミズムへの抵抗という意味合いが多分にありました。西洋美術界とは美術大学機関（アカデミズム）であり、今以上に保守的かつ権威的で「正当な美術教育を受けた者しかアーティストと認めない」と、厳格に守られていた時代です。日本の美術大学でも西洋の流れを受けて、目に映るそのままを具象的に描くデッサン、自然主義的な手法こそがもっとも優れているとされてきました。残念ながら、日本でもその流れは未だに根強いのですが……。

こうした背景を青騎士と重ね合わせてみると、青騎士の芸術運動がいかにカウンターカルチャー的な思想を掲げていたかがわかりますよね。単に美しいものを描くことがアーティストなのではない。メインストリームであるアカデミズムを疑問視し、「芸術を通して精神的な真理を表現するのだ」と、『青騎士』の誌面で訴えました。そしてそれは、単にアカデミズムに対する反動だけではなく、同時に近代化によって本来の人間性や精神性を失いつつあった社会全体への批判でもあったのです。

子どもや部族民など、美術教育を受けていない人々（アウトサイダー）のプリミティブでイノセント（無邪気）な表現を評価し、アカデミズムと同列に取り上げたというこの動きは、この後の1945年、フランスで精神障害者等による芸術をアール・ブリュット（生の芸術）として見出したジャン・デュビュッフエよりもずっと早かった。青騎士に途中から参加するようになったパウル・クレーもまた、子どもや障害のある人々が描く絵に惹きつけられた一人でしたが、理性が介さない“あわい”の世界に憧れ、自らも子どものような無邪気なビジョンを絵に表していきます。「芸術の本質は、見えるものをそのまま再現するのではな

く、目に見えないものを見えるようにするものである」という、クレーの有名な言葉もありますが、青騎士の作家の多くが、理性をどう扱うかについて考えていた。カンディンスキーも、精神世界に関心が強く、ヨガを始めたりベジタリアンになったりと身体的なアプローチを試みていたようです。

### 子どもの詩と絵の雑誌「きりん」を手がけた「具体」の芸術家たち

では、日本にこうした動きはあったのでしょうか。青騎士と同時代ではありませんが、そこから数十年が経った1954年から18年間、第二次世界大戦後から高度経済成長期にかけて、吉原治良を中心に関西で活動した前衛美術集団「具体美術協会」が、おそらく日本において子どものアートに着目した最初でした。

吉原の「人の真似をするな。今までにないものをつくれ」という指導のもとに、絵画をはじめ、野外や舞台などで実験的にアクションやハプニングを起こし、身体性や強い精神性を表す作品を数々発表します。その根底には、戦争という全体主義から解放されて、自由な新しい未来に向かうエネルギーがあり、「遊び」からアートを作り、鑑賞者も“遊ぶ”べきだという考えかたがありました。そして、具体のメンバーの一人である浮田要三が児童詩誌「きりん」の編集長だったことで、誌面にも次第にモダンアートの要素が組み込まれていくようになります。子どもが描いた抽象画を取り上げ、子ども向けの美術記事を嶋本昭三が担当。具体のメンバーの多くは、幼稚園や小学校などでアルバイト的に絵画指導をしていたそうで、誌面でも度々「絵に上手い下手はない。人に説明できるような○○らしい絵はダメだ」と、子どもたちに向けてモダンアートを推奨し、親に向けた子育てのページでは、「遊びを抑制して潰してはいけない。大人の美術の概念にはめないで」と促しました。1956年に具体が兵庫の芦屋公園で開催した野外の展覧会「野外具体美術展」において吉原治良が発表した、芝生の上に設置した大きなボードに大人も子どもも自由に落書きしてもよいという作品「自由に描いてください」も、とても象徴的です。ちなみに、具体の創設メンバーである嶋本昭三は、のちに日本障害者芸術文化協会の会長も務めていますね。

### 晩年に向かうにつれ、子どもの感性を取り戻した芸術家たち

こうして、冒頭でも話した4歳までの子どもの感性、というのはメインストリームにこそ取り上げられないにせよ、芸術家たちの間ではいつの時代も“求めても取り戻せない”憧れでした。けれども、これを老年期に取り戻せたアーティストもいるのではないかと、という見解もあります。たとえば、晩年の画家、アンリ・マティス。1941年にがんの手術をしたあとと車椅子の生活になり、さらにはベッドから起き上がれなくなっても作品を作り続けた作家ですが、こうして体が不自由になった70~80歳にして発表した新しい切り絵シリーズは、マティスの傑作として評価を受けました。

印象派のクロード・モネも、晩年白内障を患います。外の風景がよく見えなくなって、同じ風景を描いているのだけど、どんどんぼやけて抽象画に近づいていく。この晩年の作品は、パリの

オランジュリー美術館の常設展示で観られますが、光と霧が立ち込めている中に、かすかに池と蓮が見えるような作品でした。

アメリカの抽象画家、ウィリアム・デ・クーニングも、80年代の終わりにアルツハイマー型認知症になりました。認知症の初期の頃は、割と重たい絵が多いのですが、90年代に入ると色がどんどん軽くなっていきます。それまでは数カ月かけて描いていたのが、どんどんペースが上がり、完全に描けなくなる91年まで描き続けたと言われています。

そしてこの話で忘れてはならないのがパブロ・ピカソですね。1965年から、亡くなる1972年までの晩年期に注目してみます。この頃になると、もうピカソはすっかり世界のスーパースターだったのですが、10年間パートナーだったフランソワ・ジロと別れたことで、ジロに暴露本を書かれてしまいます。ずっと守られてきたスターの日常が晒され、プライドはスタスタになり、70代に入ると体の調子も悪くなってきた。そんな状態から、あるとき新しい絵をどんどん描き始めます。ビビットでエネルギー、それまでのコントロールされてきたピカソ像が完全に飛んでしまうような絵でした。70年代、フランスのアヴィニオンで、この新しい作品群をピカソ本人がキュレーションする展覧会を開きました。ピカソという豪華なフレームがイメージでしたが、ここでは額にも入れずワイルドに展示した素朴な展覧会だったので多くの来場者が「ピカソももう終わりだ」とがっかりした反面、一部の批評家たちは、最高傑作だと賞賛しました。ピカソ自身、この頃にはそうした批評すらどうでもよくなっていて、子どものようなクリエイティビティを取り戻した最後の10年、もっとも多くの作品を残しました。今となっては、このピカソの晩年の作品は、具象性を持ちながらも表現主義的で、のちの80年代に起こるニューペインティングの先駆的表現だったと再評価されてきています。

体のあちこちが不自由になっても、体に染み込んでいる画家としてのスキルと、理性や論理的なマインドから解放された軽やかさ。老年期にこれが生かされた作家というのは、とても興味深いですね。

何かが降りてきて描かされるような、イノセント（無邪気）な瞬間。どんな時代にも芸術家たちの多くは、この子どものような感性を羨望の眼差しで見ているのではないのでしょうか。

今回のレクチャーは、もう一つの世界を生み出す力……「ビジョン」をテーマにお話したいと思います。お楽しみに!

[参考文献]

[Emile: OR, ON EDUCATION] (1762) Jean-Jacques Rousseau  
[The Blaue Reiter Almanac] (2005) MFA PUBLICATIONS  
[Gutai : Splendid Playground] (2013) Guggenheim Museum  
[Pablo Picasso /Late Picasso ~Paintings, sculpture, drawings, p  
rints, 1953-1972] (1988) Tate Publishing  
[Consciousness and the Brain] (2014) Stanislas Dehaene

### ロジャー・マクドナルド / ROGER MCDONALD

アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]副ディレクター。1971年生まれ。ケント大学にて宗教学修士課程修了後、美術理論にて博士号を取得。博士号では近代アートとスピリチュアリティを研究。2002年、仲間とともにAITを立ち上げ、現代アートの学校MADを開講。現在もプログラム・ディレクターをつとめる。個人美術館フェンバーガー・ハウス（長野県佐久市）ディレクター。現在は、アートと変性意識の関係をテーマに、研究やキュレーションを行う。

<http://www.a-i-t.net/ja/>



### 目の見えない人が植物に触れる行為を通して 視覚と触覚の相互作用を生むアート「Touch Tours」 エレン・アンリエット・サーク (アーティスト)

ノルウェーを拠点に活動するアーティスト、  
エレン・アンリエット・サークは、  
目の見えない人々と植物の対話を  
「触れる」という行為から描いた映像作品  
「Touch Tours」を制作している。  
手と植物の動きにフォーカスした映像は、  
視覚や聴覚を通して鑑賞者の感覚を触発する。  
彼女の展覧会や作品集では、映像に加え、  
点字を扱うことによって触覚を通して  
読める工夫がされている。目が見える人も  
見えない人も平等に体験できるこの作品は、  
どのように生まれたのだろうか？  
[構成・文] 網野奈央 (torch press)



Video still from Ellen Henriette Suhrke's video Touch Tours. Cinematography: Tor Willy Ingebrigtsen



エレン・アンリエット・サークによる展示の写真集「Touch Tours」  
(Multipress刊、2017年)  
Photo: Line Bøhmer Løkken/Multipress



2017年の展覧会「Touch Tours」Hordaland Kunstsenter  
(ベルゲン)での展示風景。Photo: Bjørn Mortensen

#### 目の見えない人のアート鑑賞 「タッチ・ツアー」との出会い

—「Touch Tours」のシリーズを始めるきっかけを教えてください。  
どのような経緯で触覚について着目し、植物を扱うことになったのでしょうか。

研究のためにローマを訪れた際に、最初のアイデアをひらめきました。そこで、ボルゲーゼ公園のバロック彫刻に特別な許可を得て触っていた、目の見えない女性に出会いました。「タッチ・ツアー」と呼ばれているツアーの間、その目の見えない人はアート作品について、「見る」ことよりも親密な関係を築いていたのです。私はオスロに戻ってから、美術館の中で目の不自由な参加者のためのガイドツアーを企画し、ボルゲーゼ公園の出来事を再現したいと考えました。でもノルウェーでこのようなツアーはあまり一般的ではなく、せいぜい彫刻作品のレプリカに触れるくらいでした。代わりに市の植物園に聞いてみると、前向きな返答を得られたので、この植物園で目の不自由な参加者のために、園芸家と触覚にまつわるツアーを2年間開催しました。

—植物と触覚という組み合わせが、参加者と鑑賞者のどちらにも新しい体験を与えてくれますね。

園芸家は、園内のどのエリアに連れて行けば最も強烈な印象を与えられるかを、熟考した上で決めています。香りのある庭では、独特の強い香りを放つ植物が植えられており、熱帯の温室では空間全体で総合的な体験をもたらしてくれます。植物を使った意図は、視覚を越えてすべての感覚と対話するため。同時に、植物は触れることで反応する生き物だという面白い発見もありました。たとえばオジギソウは、触れたり揺すったりすると葉が内側に閉じてしまうので、実際に「Touch-me-not (私を触らないで)」という名前がつけられているんです。

—制作する上で、苦労した点はありますか？

プロセスには特に時間がかかりました。美術館にコンタクトする数年前に、すでにこのアイデアは私の中に膨らんでいて、そこから植物園に連絡するに至るまでにもしばらく時間がかかりました。またツアーの参加者を見つけるために、ノルウェーにある目の見えない人のための団体に協力をお願いしていたこともあり、さらに時間がかかりました。

—映像が中心となっていますが、どのように撮影を進めていったのでしょうか？

映像を作るための素材を集めている頃、映画を撮影しているカメラマンにツアーを記録してもらうよう依頼しました。映像の中でプライベートツアーを受けていたエリンという女性に出会ったのはラッキーでしたね。彼女は特別な存在で、制作の中で大きなインスピレーションを与えてくれました。

#### 自分の手で“見ている”という感覚

—手の動きにフォーカスすることで、見る側にも視覚を通して触覚が刺激されますね。最初からこういう映像を撮りたいと意図していましたか？

映像を作るとき狙いのひとつが、鑑賞者たちもまるで自分の手で「見ている」ような感覚をへと導くことでした。

—ライターでありアーティストでもあるインガー・ウォルド・lund (Inger Wold Lund) による点字のテキストが展覧会でも作品集にも使われていますが、実際にどのような内容が書かれているのでしょうか？

点字は目の見えない鑑賞者と映像を共有するために制作した、オーディオガイドをテキストとしてまとめたものです。それぞれのシーンは短い時間軸ですが、lundは詩的な表現を使わずに、彼女が見た

シーンを正確に翻訳してくれました。「Touch Tours」の本では映像の静止画で構成されていますが、テキストでは一貫して動作を説明しています。それぞれのイメージの上には、シルクスクリンで点字の解説が刷られています。目の見えない読者も、見える読者も同じように読めて、魅力のあるものにしたかったのです。

—目の見えない方にはイメージは見えていませんが、展覧会を訪れた方からの感想やフィードバックはありましたか？

視覚的に気にならないように、点字のテキストはA4サイズの白い紙に印刷され、フォルダに入れられています。私が話した目の見えない読者は、触覚と視覚の要素の両方に配慮された作品集が読めたことを喜んでいました。目が見えないからといって、必ずしもイメージや写真集に無関心であるとは限らないのです。

—目の見えない方との共同作業によって自身に新しい発見や気づきはありましたか？

私自身の感覚、そしてそれを使うことに多くの気づきが得られました。たとえば、植物を研究するときや展覧会を観に行くときに、以前よりも触覚を使う機会が多くなりました。

—今後はどのようなプロジェクトに取り組んでいきたいですか？

見ることと見えないことの境界線を探求するような作品を作り続けていきたいです。またアナログ写真と点字のテキストを使って、もう一冊点字の本を作りたいと考えています。もしかしら美術館で彫刻を触ってみようという、元のアイデアに再度チャレンジするかもしれません。



2016年にオスロの植物園で開催された、目を隠した参加者のための触覚のツアー。Photo: Ellen Henriette Suhrke



エレン・アンリエット・サーク / ELLEN HENRIETTE SUHRKE  
1984年、ノルウェーのラナに生まれる。現在オスロ在住。ヘルシンキ芸術アカデミーで学んだのち、2013年にベルゲン美術工芸アカデミーの修士課程を修了。自然環境と人間の関係において不可欠な役割を果たしている、自然と文化を深く考察するような作品を制作している。ノルウェーを中心に数々の個展、グループ展に参加している。2017年にMultipressから作品集「Touch Tours」を出版。



## 左手から彫り出す“地球”の一片

松浦 繁 / SHIGERU MATSUURA (1971-)

宮城県仙台市在住の松浦繁さんは、1990年に脳内出血にかかり、リハビリで木彫と出会う。障害の残った現在も1カ月に3度ほどのペースでアトリエへ通い、鉋や電動ノミなどの道具を使いながら、左手のみで制作している。松浦さんの作品の魅力は、まずその色だ。原色は使わず、水分を多めに含んだ絵の具を混色し、下地の上へ重ねていく。仕上げは指を使って何度も撫でるように塗る。表面が彫った跡で凹凸としているので、色がべったりと張り付くことがなく、まばらなレイヤーが豊かで軽い色彩を生んでいる。「両手両足の自由が効く身体であつたら、きっと木彫は続けていないと思う」と松浦さんは話す。手術を経験した25歳から、テーマは一貫して「地球」。現在制作中の《希望》は、テレビで目にしたモアイ像を造形のヒントにし、明るさが天へ向かっていくようなイメージでつくっているそうだ。[文：磯崎未菜]

1. 三日月の夜 / 655×620×88mm / 水彩絵具、木 / 制作年不詳 / 作家蔵  
2. 岩かけのヨット / 400×1215×143mm / 水彩絵具、木 / 制作年不詳 / 作家蔵  
取材協力:NPO法人エイブル・アート・ジャパン / SOUP (障害者芸術活動支援センター@宮城)  
写真:三浦晴子



1



2

